

蓮如上人の絵伝と絵解き本

—— 碧南市願随寺・康順寺蔵本を中心に ——

小 山 正 文

緒 言

近年、蓮如上人にも聖徳太子や法然上人、あるいは親鸞聖人などと同様の一代記を描く掛幅軸装形式のいわゆる御絵伝が、北は北海道から南は九州鹿児島に至る全国各地より、室町時代に遡及できる作品こそはないものの二百点近くも存在している事実が報告され、⁽¹⁾大いに注目を集めるようになった。

いまここにとりあげる愛知県碧南市鷺塚町の願随寺、同市札木町の康順寺にそれぞれ所蔵される各四幅本蓮如上人絵伝は、いずれも未知のものというわけでは決していないが、あえて両絵伝を問題としたのは、つぎのような理由による。すなわち前者の願随寺本には、絵伝の旧軸木と称されるものが残っていて、それに寛文五年（一六六五）の修理墨書銘がしたためられていること。安城市東町の法行寺に願随寺本の天保九年（一八三八）模写本があり、

もとそれは願随寺と指呼の間にある鷺林町の蓮成寺旧蔵品であること。願随寺では現在も四月の蓮如忌に絵解きが行なわれており、昭和七年（一九三二）筆写の絵解き本『蓮如上人御伝絵』上下二巻が伝えられていること。また後者の康順寺本については、その裏書から明治二十五年（一八九二）に写された絵伝と知られること。康順寺にも『蓮如上人御伝絵記』という昭和三年（一九二八）鳥居富弥氏が写す絵解き本が存在すること。その絵解き本の内容が細部に至るまで同寺絵伝の描写とよく一致すること。康順寺蔵の『蓮如上人御伝絵記』は、同寺に近接する吹上町榮願寺蔵の同じく絵解き本『蓮如上人西端伝記』、ならびに上記願随寺蔵『蓮如上人御伝絵』と同一筆致で、三つの絵解き本は共に鳥居富弥氏が写したものとみられること等々が判明するなど、両寺の蓮如上人絵伝をめぐっては、種々様々の興味深い事象があるようにおもわれるので、以下順次そのへんのところを述べてみたい。

鷺塚坊の成立

さて、蓮如上人は願随寺や康順寺のある三河国へ応仁二年（一四六八）に下向し、西端から鷺塚、浅井、土呂あたりを経回したと伝えられている。上人の第十男実悟兼俊が、天正三年（一五七五）に編した『山科御坊事^{其時}代^③』によれば「土呂^{三州} 鷺塚^{三州} 針崎^{三州} 佐々木^{三州} 上宮寺^{三州}」が、三河における上人関係の当流坊々であったと記されており、同じく実悟の手になる天正八年（一五八〇）の『本願寺作法之次第^④』にも「蓮如上人ハ野村殿 堺御坊^{越州} 吉崎^{播州} 英河^{參州} 土呂^同 鷺塚^{大和} 飯貝^{紀州} 黒江^文 所^神 などハ開山にて御入候 但鷺塚ハ実如にて御入候歟」とみ

えるごとく上人は、三河の土呂や鷺塚の地にはやくから注目していた事実が知られる。その背景には佐々木上宮寺の如光が大きく介在していたことは否めず、げんに『太子山上宮寺縁起絵伝』⁽⁵⁾第四幅には、「如光上人之墳墓築于同国鷺塚」の場面が描かれており、長徳寺という上宮寺の末寺が鷺塚に存していた事実を天正十九年（二五九二）の『末寺帳』⁽⁶⁾は伝えている。いっぽう江戸初期の通称『別本如光弟子帳』といわれる『末寺鏡』⁽⁷⁾によると、「鷺塚⁽⁸⁾子^{順教}慶心⁽⁹⁾尾笏⁽¹⁰⁾ちた郡おツかわ二而円教寺と申候 同二男祐珍越前へ参円行寺ト名乗候へく候」、また「鷺塚⁽¹¹⁾恵正⁽¹²⁾ 同順敬 淨円 今ハ願随寺ト申候 尾笏⁽¹³⁾西崎⁽¹⁴⁾ノ郷^{上宮末寺也}尊心おつかわへうつり候而円教寺と申候 次男祐珍ハ越前二円行寺と号す」とあつて、鷺塚の地と上宮寺が、おそらく蓮如上人以前から深い関係にあつたことをうかがわせるのである。願随寺には上記のような歴史的背景を物語る蓮如上人筆の六字名号をはじめ実如上人の裏書を有する次掲のごとき永正十一年（一五一四）と同十六年（一五一九）の方便法身尊像が現存する。⁽⁸⁾

大谷本願寺釈実如（花押）

永正十一年^{甲戌}十一月廿六日

方便法身尊像

参州幡豆郡志貴庄

願主釈恵性

大谷本願寺釈実如（花押）

永正十六年己卯七月廿八日

三河国

方便法身尊像

幡豆郡志貴庄

鷲塚惣道場物也

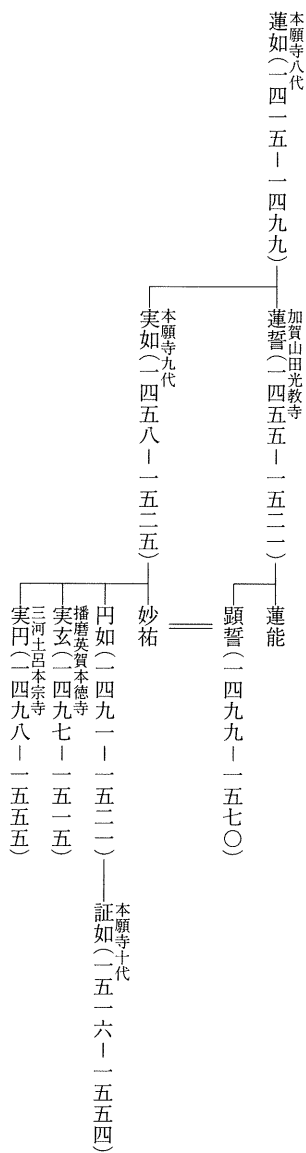
前者永正十一年の尊像願主恵性が、すなわち事実上の願随寺開基で、いま見えない年月日の次行には、当初おそらく「佐々木上宮寺門徒」とあったであろうことは、前掲『別本如光弟子帳』の記述よりして疑いない。後者永正十六年の尊像には、願主名がなく鷲塚惣道場宛となっている点が異例であるが、実はこれと同年月日の裏書をもつ方便法身尊像が、姫路市本徳寺に所蔵されていて、その願主は顕誓と書かれている。

釈実如（花押）

永正十六年卯七月廿八日書之

願主釈顯誓

右の願主顯誓は蓮如上人第四男蓮誓の第九子で、六歳のとき加賀山田光教寺の兄蓮能の嗣となった人だが、享祿の錯乱で証如上人から二十年に及ぶ勘氣を受けた。天文十九年（一五五〇）に赦免されてからは、本願寺御影堂の鍵役にあたり、播磨英賀本徳寺の実円を補佐したが、永祿十年（一五六七）異安心の嫌疑をかけられ英賀に蟄居を命ぜられた人物で、『反古裏書』、『今古独語』の著者として知られている。顯誓が補佐をした実円は、実如上人の四男で三河土呂本宗寺に入寺するも、本徳寺の兄実玄没後は同寺も兼住し、三河よりむしろ播磨に多く在住したよ



うである。実は願随寺のある鷺塚の地は、実如上人の時期上宮寺から次第に本宗寺へ管掌権が強化されていくときで、ために天文十年（一五四一）実悟撰『日野一流系図』⁽⁹⁾の実如上人項には、「河州枚方坊^并参州鷺塚之坊開山」と記され、永禄十一年（一五六八）顕誓著『反古裏書』⁽¹⁰⁾では、「三州本宗寺ノ御坊 土呂 鷺塚 勝万寺 上宮寺 本證寺退転シ 尾張国報土寺 願誓寺 長島願証寺国ヲサリ給ヌ」とあるのも、上掲の裏書類と共にその間の事情を物語るものといえよう。

江戸時代初期まで鷺塚は衣浦に浮ぶ風光明媚な島で寺内町も形成されていたことが、連歌師谷宗牧の『東国紀行』にみえる次の記事からも知られる。⁽¹¹⁾

〔天文十三年（一五四四）閏十一月〕十三日 岡崎までといそぎ待れば（大浜称名寺）住持も馬にて鷺塚までわたりたまへり（中略）わしづかの寺内一見してわかれたり むかひは吉良大家御里成べし この眺望えもいはぬ入江の磯なり

また『信長公記』には「三河国端に土呂 佐座喜^(タキ) 大浜 鷺塚とて 海手へ付て然るへき要害 富貴にて人多き湊なり 大坂より代坊主人れ置き 門徒繁昌候て 既に國中過半門徒になるなり」とあり、⁽¹²⁾鷺塚は要害であると同時に人の往来も繁き交易湊でもあった。が、さしもの鷺塚もかの永禄六・七年（一五六三・四）の三河一向一揆で壊滅状態となり、⁽¹³⁾その憂き目は天正十一年（一五八三）の赦免まで続くこととなる。赦免後に復興された鷺塚坊が、現在の西派願随寺であり、隣寺の東派蓮成寺にはかならない。

このように鷺塚の地は、蓮如・実如・実円・顕誓の本願寺一門一家衆が関与し、上宮寺・本宗寺・本徳寺など御

坊格大坊主寺院とも深い関係にあるなど、歴史的にみてもきわめて重要な土地柄であることがわかり、そうした伝燈をもつ願随寺や蓮成寺に一見の価値をもつ蓮如上人絵伝が伝えられたのも、まことにうべなるかなとおもわしめるものがあるう。

願随寺本蓮如上人絵伝

願随寺所蔵の蓮如上人絵伝は四幅からなる紙本著色本で（図版一）、その大きさは縦一三一センチ、横五七センチを計るが、料紙は各幅上下二枚を真中で継ぎ合せ、さらに数センチ巾のものを右端や左端に足しており、全体的には巾狭の絵伝となっている。全幅すやり霞で六段区切りとし、各段三話前後を入れながら下より上に向って説話が進行するよう描かれる。その描写は総体にこじんまりとしており、どこか奈良絵本をおもわせるような素朴な趣きが感じられて、好ましい上人絵伝と評することができる。描かれる話の内容は、かならずしもすべて判明しているわけではないが、およそ六十近い場面が設けられているようで、その大体を記しておけば、つぎのようになる。

第一幅

〔第一段〕 存如上人石山寺へ参詣する 蓮如上人の母君霊夢をみる 母君の懷妊

〔第二段〕 蓮如上人の誕生 母君鹿子御影を描かせる 母君大谷本願寺を退去する

蓮如上人の絵伝と絵解き本

〔第三段〕 上人手習始め 青蓮院にて出家得度する 比叡山で修学？

〔第四段〕 南都遊学？ 日吉山王権現の擁護で琵琶湖を渡る 越前国荒地山血塩松での教化

〔第五段〕 棕山篠生寺 親不知子不知の難所 越後の親鸞聖人旧跡地国分寺・逆竹・八房梅をたづねる

〔第六段〕 比叡山僧大谷本願寺破却を詮議 寛正六年の法難で下間安芸・佐々木如光奮戦する

第二幅

〔第一段〕 堅田の明誓蹴上の坂を登る 上人灰部屋にかくれる 荒蕪卷きの真影を背負い上人大津へ脱出 山僧の長刀で上人足をけがする 日野岡峠へ門徒がむかえにくる

〔第二段〕 叡山の僧徒近江金森・堅田を攻める 堅田の道流上人を小船で明誓宅まで送る

〔第三段〕 堅田明誓宅で女人を化導する 上人お手植えの松？ 如光の勧めで三河を教化する

〔第四段〕 東海道水口駅の浅井又九郎が内報により上人比叡山僧からねらわれる 文明三年初夏聖人の御真影を三井寺へ預け越前に趣く

〔第五段〕 湖上の船中にて船人を化導する 鹿島明神の鹿が仏法有縁の地吉崎を案内する 加賀井振橋の法海坊上人に笹のちまきをさしあげる 三国湊の三人遊女姉妹の教化

〔第六段〕 朝倉氏の外護により吉崎御坊を建立 吉崎御坊なる

第三幅

〔第一段〕 嫁威し肉付面の話 富樫幸千代自決する

〔第二段〕 御文一帖目第七通弥生なかばの根おこり 本光坊腹籠りの聖教

〔第三段〕 文明七年三月吉崎御坊再建 下間安芸法眼囲碁で朝倉経景とけんか口論する 経景平泉寺・豊原寺僧徒を誘い超勝寺に火をかける

〔第四段〕 経景軍吉崎御坊を攻め放火する 上人安芸法眼を勘当し吉崎を去る 吉崎より船にて若狭小浜に着いた上人は富永権守に迎えられ教化する

〔第五段〕 出口光善寺建立につき大蛇女を濟度する 作治郎の麦刈り

〔第六段〕 上人道顕の請いにより堺の教化に趣く 契丹国人上人の教化を蒙る

第四幅

〔第一段〕 海老名五郎左衛門の土地寄進により山科御坊を建立 紀州の喜六太夫を教化する 御真影を三井寺より遷座する

〔第二段〕 紀州の作仏坊上人に二尊連座御影を請う 上人大和国吉野桜を一覧

〔第三段〕 堺の信証院? 四天王寺参詣のさい太子の導きにより仏法有縁の地をえる

〔第四段〕 四天王寺の旧地に太坂御坊を建立する 明応八年二月太坂より山科へ移る

〔第五段〕 病中教化 明応八年三月二十五日上人往生 翌二十六日送葬

〔第六段〕 茶毘に付す

あらまし右のような内容をもつ願随寺本蓮如上人絵伝は、それではいったいいつごろの作品なのであろうか。これにつき願随寺所蔵の絵解き本『蓮如上人御伝絵記』上巻は「拝み上げ奉る四幅の御画伝は蓮如上人御一代の間吾くが為めにかゝる御苦勞下されたるを実如上人顕し遊はさせられたる御画像」と記し、本絵伝を本願寺第九世実如上人（二四五八一―一五二五）の作とする。しかし後述の通りこの絵解き本は、元来願随寺本のそれではないので、実如上人説は当たらないばかりではなく、蓮如上人絵伝そのものの成立が、問題点もあるが長野県須坂市勝楽寺本にみえる本願寺第十一世顕如上人（一五四三―九二）の天正九年（一五八一）を多くさかのぼらないとされるところから、なおいっそう実如説は信ずることができないのである。かかる見地から東本願寺出版部発行の『蓮如上人絵伝の研究』は、願随寺本を次のように解説する。⁽¹⁵⁾

『蓮如上人御伝絵記』という台本が残っており、絵解きがなされていた。安城市の法行寺本（鷲塚蓮成寺旧蔵）は全く同じ絵相である。天保九年（一八三八）頃の成立。

右説の根拠は後記する法行寺本が、天保九年の裏書をもつところよりきているわけだが、本稿掲載の図版からもわかるように法行寺本は願随寺本の明らかな写しであるから、正しくは天保九年以前の成立とすべきであろう。げ

んに同書所蔵の「蓮如上人絵伝所蔵一覽」では、⁽¹⁶⁾そうになっている。問題はその「以前」がどこまで遡及できるかであるが、このことにつき筆者はさきに願随寺本の画風に単純類型的な構図がみられ、優雅さに欠けた野趣のある絵の筆法より、室町末期から江戸中期にかけて多作された奈良絵本的な趣きが感ぜられることを指摘しておいた。はたして願随寺に絵伝の旧軸木といわれるものがあつて、それに次のような墨書銘がしたためられており（図版二）絵伝が寛文五年（一六六五）に修理されたことを伝えている。

當寺六代浄玄三拾二歳

願随寺常住物也

寛文五_乙曆三月上旬奉修福仕表_シ清笑軒重次

この墨書銘よりすれば、絵伝は確実に寛文五年以前の製作と知られ、蓮如上人絵伝の中でもきわめて古作の部類に属することが判明する。すでに触れた通り蓮如・実如上人と関係深い鷲塚の坊が、永禄六・七年（一五六三・四）の三河一向一揆で壊滅後復興をみるのは、天正十一年（一五八三）の赦免以降で、同十九年（一五九二）の『上宮寺末寺帳』に「⁽¹⁷⁾わつか_{長徳寺}」とみえるのが、それに当るものと考えられる。この長徳寺が東西分派後、鷲塚御坊遺蹟としての西派願随寺と東派蓮成寺となるのであろう。いっぽう上宮寺と共に鷲塚の管轄権を握っていた一家衆寺院土呂本宗寺が、赦免後の数度に及ぶ寺地移転命令の中で、慶長三年（一五九八）に短期間ではあるが、鷲塚の地へ

移っており、「鷲塚山本宗寺実田御坊之大事」と称せられた事実もある（『土呂山畑今昔実録』⁽¹⁸⁾）。こうした鷲塚における真宗復興の潮流を勸案するならば、願随寺の蓮如上人絵伝も上人百五十回忌の慶安元年（一六四八）あたりに置いてもあながち不当でないかも知れず、その時期はあたかも衣浦に浮ぶ島であった明媚な鷲塚が、幕府による矢作川の築堤で陸続きとなり、⁽¹⁹⁾ 諸人の参詣を容易にするときとも重なってくる点で興味深いものを覚える。もつともそれには当然のことながら軸木が真に絵伝のものであるのかどうか、また絵の様式が江戸初期まで遡及出来るや否やにつき専門家の意見を聴く必要性も痛感されることであるが、もし右のように願随寺本絵伝の成立を江戸初期とした場合、波及的に見直さざるをえなくなるのが、須坂市勝善寺蔵の蓮如上人絵伝であろう。この絵伝には天正九年（一五八二）の次のような裏書がある。⁽²⁰⁾

大谷本願寺釈願如（花押）

天正九年^{辛巳}四月十四日

蓮如上人縁起

願主釈浄玄

蓮如上人絵伝のほとんどは、上人三百回忌の寛政十年（一七九八）以降の作となる中であって、この勝樂寺本はかけはなれて古い年代をもつところから、裏書を疑問視する向きが非常に強い。⁽²¹⁾ しかし筆者は先年蒲池勢至氏とこ

れを実査した際、問題の裏書は他の願如上人の裏書と比較しても様式、筆致とも何の疑点もなく、また表の絵も他絵伝のものより格段の優秀性があるて、文字通り天正九年の作品とみてもよいのではないかとおもった。⁽²²⁾ いまその勝楽寺本と願随寺本を並べてながめてみると、やはり勝楽寺本の方があらゆる点で先行作品であることは否めず、その間隔は優に半世紀以上はひらいているように思量される。私見のごとく願随寺本を慶安元年頃のものとするならば、まさしく勝楽寺本は天正九年の作品として十分通用するとおもうのであるが、いかがであろうか。諸賢の垂示を切願したい。

願随寺本蓮如上人絵伝の模写本

ところで安城市東町屋敷八七の真宗大谷派法行寺に願随寺本蓮如上人絵伝の模写本がある(図版三)。法行寺本は願随寺本と同様紙本着彩四幅で、縦一四五センチ、横五九・八センチを計測する。幅数はもとより絵相内容に至るまで法行寺本は願随寺本と同一であるが、前者には明らかな写しぐれが認められるので、後者を模写したものであることは否定しがたい。はたして法行寺本には次掲のごときふたつの裏書があつて、その間の事情をみずから語るのである(図版四)。

三河国碧海郡
天保九戌年

鷺塚村池端

松応山蓮成寺

一随（花押）

明治廿四年三月上旬

三河国碧海郡桜井村

水井山法行寺

石川法憧（花押）

このふたつの裏書のうち、天保九年（一八三八）のそれは墨で抹消されているが、ともかくこれよりして法行寺本が、元来鷺塚蓮成寺の絵伝であつたことがまず判明する。蓮成寺は願随寺に隣する同じ鷺塚御坊の由来をもつ上述来の東派寺院にはかならない。一随は同寺第十二代（中興五代）の住職で、十年後の嘉永元年（一八四八）に蓮如上人三百五十回忌を迎えるに当り、この絵伝を作つたのであろうが、そのさい手近な願随寺本を粉本にしたものとおもわれる。三河における蓮如忌は、上人の三百回忌から四百五十回忌の前後が最盛期であつたから、願随寺と同様の上人遺蹟寺院である蓮成寺でも、この絵伝は大いに活用されたにちがいない。にもかかわらずどうしたわけ

か蓮成寺では、せっかく作った上人絵伝を四百回忌目前の明治二十四年（一八九一）に手放しており、それが法行寺へ入ったのである。したがって蓮成寺で本絵伝が使用されたのは、わずか半世紀ばかりの間で、いまでは法行寺へ移ってからの歴史の方が倍も長いことになる。蓮如上人絵伝は親鸞聖人絵伝と異なり本山からの下付免物ではなかったために、たとえば安城市本證寺本のごとききわめて類似した絵相内容をもつ数本の上人絵伝もないではないが、聖人絵伝のように画一的な絵相でないのをひとつの大きな特色としている。したがって願随寺本と旧蓮成寺本にみられるがごとき細部まで全同する上人絵伝は、いまのところ東京都文京区小日向の本法寺と愛知県幡豆郡一色町大塚の本法寺に伝わる両本ぐらいのものである⁽²³⁾。もつともこれはその寺名からも察しがつく通り、両本法寺は江戸の本坊と三河の掛所という関係にあり、絵伝も上人三百五十回忌を期して弘化三年（一八四六）に同じ絵師（尾州公臣太岳と伝う）が、同時に二部描いたものであった。だから両本法寺本は願随寺・旧蓮成寺両本と同様、細部に至るまで全同するとはいえ、おのずとそこに双子の兄弟と親子の関係という違いが存するし、時代もやや下ることを知っておかなければならない。かかる点からも願随寺・法行寺（旧蓮成寺）本両上人絵伝は、やはり今後注目していく必要があるかとおもう。

願随寺本蓮如上人絵伝の絵解き

願随寺の蓮如上人絵伝は、毎年四月の蓮如忌に絵解きが行われ、その絵解き本も残っている（図版五）。絵解き

は現在近くの同寺門徒杉浦喜義氏によってなされているが、以前はいまもご健在の前住職杉浦淳雄師が解いておられた。杉浦氏は前住職より絵相の内容を絵解き本にもとずきながら教示してもらい行うようになったという。お二方からうかがったところによると、絵解きは節をつけたり、昔語りの口調でするものではなく絵場面の説明を行う程度とのことである。三河は上人絵伝全国最大残存率を誇る土地柄であり、昭和三十年代前半までは絵解きもさかんであったが、いまではそれがすっかり衰滅してしまっているのは、実に寂しく惜しまれてならない。それだけにたとえ昔ながらの本格的な絵解きでなくとも、願随寺のそれは貴重な存在であり、今後も続けてもらいたいものである。

ところで、願随寺の絵解きで使用される台本は、前にも記したように上・下二巻よりなる『蓮如上人御伝絵』と題するもので、一枚二十行の圭紙四十一枚にペン書きされている。奥に「昭和七年四月下旬謹写」の写本年代はあるも、筆者名は記されていない。しかし本書の筆者は、のちほど明らかにするであろう。この絵解き台本において不審なのは、たとえば絵伝第二幅目の下より三段目右側の場面説明を指示するのに、欄外へ「二ノ三右」といった注記が随処にみられ、しかもそれが後人の筆になるだけではなく、前後左右していたり、絵伝の実際に照し全場面がないなどの理解しがたい状況が認められる。この現象はいうまでもなく絵解き本が、願随寺の絵伝のために書かれたものではなく、他絵伝の台本を転用していることを意味しよう。げんに絵伝と台本を並行して見読した場合、両者の不一致にはなほだしいものがあり、別の絵伝の絵解き本であることは否定すべくもない。これにつき杉浦前住職より、該本は同じ碧南市旧西端の康順寺蔵四幅本蓮如上人絵伝の内容に合うとの教示をえた。したがって願

随寺本上人絵伝の絵解き本は残念ながら存在せず、ために一部絵相の読み取りができない場面もあるわけで、今後
に課題を残す結果となっている。かくて上記康順寺の絵伝と絵解き本を次に検討しなければならない段階となった。

蓮如上人と西端

碧南市の康順寺は応仁寺、栄願寺と共に西端の三ヶ寺といわれ、その三ヶ寺はいずれも蓮如上人旧蹟寺院で、毎年四月の蓮如忌は「西端の蓮如さん」として非常にぎわいを呈したことは大変有名である。⁽²⁵⁾ 伝えによると蓮如上人は、応仁二年（一四六八）に比叡山の圧迫と応仁の乱をさけるため佐々木上宮寺如光の勧めで、三河国西端に向し足掛け三年教化したという。⁽²⁶⁾ 事実西端の右三ヶ寺は、上宮寺の隠居所もしくは末寺であっただけではなく、当の如光自身がどうも西端の出身者であつたらしい。⁽²⁷⁾ すなわち隠居所、末寺のことについては、如光十七回忌の文明十六年（一四八四）十一月一日に編まれた『門徒次第之事』（如光弟子帳）、天正十九年（一五九一）上宮寺三十六代尊祐（一五五七—一六〇四）の時の『末寺帳』（『天正末寺帳』）、同三十七代教祐（一五八一—一六六二）の時の『末寺鏡』（『別本如光弟子帳』）にそれぞれ後掲のごとくみえ、⁽²⁸⁾ 西畠恵久の唯願寺が如光の隠居所で、これが現在⁽²⁹⁾の西端一番寺⁽³⁰⁾応仁寺に当り、上宮寺門徒で西端の在地領主的存在であつたとおもわれる杉浦三郎左衛門の子浄西招春の道場が同二番中寺⁽³¹⁾の康順寺、同じく三郎左衛門の子で浄西の弟である祐賢から祐明・祐堅と次第するのが、同三番東寺⁽³²⁾の栄願寺であることが理解できるであらう。

『門徒次第之事』（『如光弟子帳』）

西畠ニシハタ 一箇所 惠久

『末寺帳』（『天正末寺帳』）

一隱居所にしはな

同一 祐明坊

同一 康順寺

『末寺鏡』（『別本如光弟子帳』）

西畠ニシハタ 一箇所 惠久是ハ如光院居所也、寺号唯願寺

鷹取鷹 慶了
玉イトコ也、 勝覺

西畠ニシハタ 一箇所 淨西杉浦三郎左衛門子 招春 宣如様ヨリ御免被成候、

西畠ニシハタ 祐賢淨西アト、 祐明 祐堅今ハ宣如様ヨリ榮願寺ト御免被成候、

応仁寺には次掲のごとき裏書をもつ蓮如上人下付の応仁二年（一四六八）六字名号、長享三年（一四八九）方便法身尊形、延徳三年（一四九二）蓮如上人寿像があつて、上宮寺との關係を明確にしており、三点とも願主は惠薫をあてて太過なく、この惠薫は前掲『如光弟子帳』、『別本如光弟子帳』にいう惠久のことであろう。

〔六字名号裏書〕

釈蓮如（花押）

応仁二年戊子五月廿日

願主釈恵薫

〔方便法身尊形裏書〕

大谷本願寺釈蓮如（花押）

長享三年己酉四月七日

参州幡豆郡志貴庄佐々木

方便法身尊形

上宮寺門徒同郡同庄西畠

願主釈恵萬力□

〔蓮如上人寿像裏書〕

延徳参年^辛二月^{十八日}
亥^〇〇^〇

参州幡豆郡志貴庄佐々木

大谷本願寺釈蓮如真影

上宮寺門徒同庄西畠道場

願主釈^患
^患〇^患
^患〇^患

この応仁寺のような上宮寺門徒であることを明確に示す本願寺下付免物が、二番寺の康順寺にも存在するのかどうかは聞かない。しかし同寺には画面全体がもうろうとしているも、その「聖徳太子御廟記文掘出／一銅函其蓋銘曰／吾為利生出彼衡山入日域」、「降伏守屋之邪見／終顯仏法之威徳」（一部推読）という銘文の筆致より、明らかに南北朝時代の作品であることがわかるいわゆる聖徳太子并震旦和朝先徳真影⁽²⁹⁾、および室町時代の後屏付真向垂髪聖徳太子单身立像⁽³⁰⁾、さらに同じく室町時代の作で、善導大師像と対幅であったと考えられる法然上人像⁽³¹⁾などが伝存していて、やはり三河における太子信仰の中心をなしていた上宮寺とのかかわりをおもわしめるものがある。

三番寺榮願寺には東本願寺第十四代琢如上人が万治三年（一六六〇）に下付したためずらしい如信上人像があつて、上宮寺との本末関係を明示する。

本願寺釈琢如（花押）

万治三年庚子夏五四日書之

如信上人真影

上宮寺下參州碧海郡

志貴莊西端村栄願寺常

住物

願主釈祐源

しかし、西端の三ヶ寺は鷲塚の願隨寺などと共に元禄年間〔元禄十五年（一七〇二）ともいう〕に上宮寺門徒を離れ東本願寺派から西本願寺派へ転じ現在に至っている。³²⁾

康順寺本蓮如上人絵伝

さて、蓮如上人ゆかりの地にある西端の二番中寺康順寺に伝えられる蓮如上人絵伝ならびに絵解き本であるが、願隨寺前住職杉浦淳雄氏ご教示の通り、絵解き本の方は願隨寺本と全く同一内容のものであり、さらに絵伝はその絵解き本と細部にいたるまで合致することが判明した。

蓮如上人の絵伝と絵解き本

康順寺所蔵の絵解き本と願随寺所蔵のそれは、上記のごとく同内容物であるが、ただ外題・内題および巻立てに若干の違いがみられる（図版六）。すなわち康順寺本の外題は、ただ単に「蓮如上人御伝絵」と記されているだけであるのに対し、願随寺本の方は「蓮如上人御伝絵」とまず中央に大きく記し、改行してさらに「記之上巻（記之下巻）」とやや小さ目の字で書く違いがある。すなわち前者は分巻しないのに後者は絵伝の第一・二幅を上、第三・四幅を下に分けているのであるが、これはもちろん分けない康順寺本がオリジナルなかたちであって、願随寺本の方は題記の文字も本文とは明らかに異なっているから、後人が便宜分巻し、誤って題も「御伝絵」と「記」に切離してしまったものとおもわれる。他方内題であるが、康順寺本は「西端康順寺蓮如上人四幅伝」、願随寺本は「蓮如上人四幅伝」という相違がある。これまた前者が元来の内題で、後者は願随寺の要請にて写された本であったから地名・寺名をあえてはずしたとみるべきであろう。しかし康順寺本の奥には「昭和三年十月上旬 病中謹写鳥居富弥」の書写年月と筆者の記があり、願随寺本の方は「昭和七年四月下旬 謹写」となっている。両本間には四年の年差があるも、その奥書の記し方が類似しているだけではなく、筆蹟も全く同一で両本は共に鳥居富弥氏の手になるものと断定できる。蒲池勢至氏によると同じ西端の三番東寺栄願寺に所蔵される四幅本蓮如上人絵伝の絵解き台本『蓮如上人西端伝記』も、やはりその筆致から康順寺本と同じ鳥居富弥氏⁽³³⁾というから、鳥居氏は都合三本の上人絵伝絵解き本を書写したことになる。このうち康順寺・栄願寺の両本は、両寺所蔵の絵伝と内容的に完全一致をみるが、願随寺本は既記のごとく合わないものとなっている。鳥居氏は康順寺本にも願随寺本にも「謹写」の文字を置いているところより、既成の本を書写したことは疑いない。ではその両本の原本はいつごろの成立とみて

よいのであろうか。これについては康順寺所蔵の四幅本蓮如上人絵伝が示唆を与えるであらう。

康順寺の上人絵伝（図版七）は紙本着色、縦一三二・一センチ、横七八・一センチで、第四幅目裏に、

康順寺廿三世住職

畠山祐照代写

絵伝四軸

御縁寄進

杉浦太七

明治廿五年四月

とあり、この絵伝が明治二十五年（一八九二）の写しであることがわかる。絵師の名はないが明らかに素人作とみられ、決して絵画的に価値高いものとはおもわれない。しかしともかく該裏書より絵伝が明治中期となれば、当然その絵解き本も同時期にまでさかのぼれるわけだが、注意したいのは康順寺二十三代畠山祐照師のときにこの絵伝が写されている事実であって、ことによると絵伝や絵解き本の原本は、明治二十五年以前の成立になる可能性も考えられよう。この絵伝の第三幅目下より四段左場面の親鸞聖人・蓮如上人連坐御影につき、康順寺の絵解き本は「只今では大阪の二尊院と申に宝物と成て残て有ると申ぢや」と記すところより臆測すれば、絵伝の原本も大阪方面にあったのかもしれない。⁽³⁴⁾ いっぽう同段の右に描かれる蓮如上人の契丹人化導の場面では、「其北の処は洋服を着て立て居る人はきったん国の異人であります」と洋服や異人の語が用いられているので、やはり絵伝も絵解き本も明

治二十五年をそう遠くさかのぼるものでないことがいえよう。

康順寺現住職畠山知雄師の談によれば、同寺の上人絵伝は蓮如忌のさいに役僧の岩月藤太郎氏や門徒の原田与作氏などによって永らく絵解きが行われてきたが、いまでは絵伝を掛けることもなくなってしまうという。同じ西端の栄願寺でも地元の杉浦五四郎氏や原田告治氏により永年絵解きがなされていて、告治氏のもは一部テープに録音があり、同氏旧宅には上人絵伝の絵解きに関する諸資料が今ものこっている。近年までこうして岩月藤太郎、原田与作、杉浦五四郎、原田告治氏等々の絵解き⁽³⁵⁾が西端の康順寺や栄願寺で行うことを可能にした背景には、やはり同じ地元西端の鳥居富弥氏が、何本かの絵解き本を筆写しておいた結果といえよう。

栄願寺の絵伝と絵解き本については、すでに蒲池勢至氏の詳細な報告があるので、ここでは栄願寺本と同様に絵伝と絵解き本との内容が完全一致する康順寺本のそれを最後に掲示し本稿の結びとしたい。

註

- (1) 蓮如上人絵伝調査研究班編『蓮如上人絵伝の研究』一九九四年五月 真宗大谷派宗務所東本願寺出版部。
筆者もこの調査員のひとりであったが、当時一四四点を調査することができ、その後さらに数十点の上人絵伝が、諸方に存在する由を聞き及んでいる。
- (2) 玄智景耀の『本願寺通記』に蓮如上人の応仁二年三河下向が記されるが、一等史料でないうらみがある。しかし碧南市応仁寺、安城市本證寺にそれぞれ上人筆の応仁二年五月廿日付六字名号が蔵せられているので、同年下向説も一概に否定しがたい。

(3) 『真宗史料集成』二 一九七七年二月 同朋舎 五五八ページ。

(4) 同右五六五ページ。

(5) 矢作史料編纂委員会編『岡崎市史―矢作史料編―』一九六一年十二月 岡崎市役所 図版七〇～七一 九九～一〇一ページ。同書掲載の太子山上宮寺縁起絵伝は第四幅目を欠落している。

新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史―美術工芸―』一七 一九八四年九月 新編岡崎市史編さん委員会 一八九・二八六～七・四五一ページ。右書の第三幅目は第四幅目にあたり、第四幅目は第三幅目であるから注意を要する。なお第五幅目は一八九ページにカラーで掲載。

太子山上宮寺縁起絵伝五幅は、桃山末期から江戸初期あたりの作品とされるが、この絵伝と密接な関係にある同寺の寺誌『古今纂補鈔』五巻が、享保十～十五年（一七二五～三〇）の成立であるから、それ以降の制作と知られ、おそらく明和六年（一七六九）の本堂再建に合わせ描かれたものとおもわれる。残念ながら絵伝は本堂と共に昭和六十三年（一九八八）八月三十一日の同寺火災で焼失した。

(6) 新編一宮市史編集委員会編『新編一宮市史―史料編六 古代中世史料集』一九七〇年三月 新編一宮市史編集委員会 四五七ページ。

(7) 新編岡崎市史編集委員会編『新編岡崎市史―史料^{古代中世}―』六 一九八三年三月 新編岡崎市史編さん委員会 六四一・六四三ページ。

(8) 青木馨「三河本宗寺について―土呂坊・鷺塚坊をめぐる―」（『同朋学園仏教文化研究所紀要』九）一九八六年九月参照。以下の記述には同氏の論に負うところが多い。

(9) 『真宗史料集成』七 一九七五年十二月 同朋舎 五二六ページ。

(10) 註3の七五二ページ。

(11) 『群書類徒』一八 <sup>日記部
紀行部</sup> 一九五九年十二月 続群書類従完成会 八一九ページ。

(12) 奥野高広校注『信長公記』（角川文庫二五四）一九六九年十一月 角川書店 三五一ページ。

桑田忠親校注『^訂信長公記』一九七七年十月 新人物往来社 三三二ページ。

(13) 註10に同じ。

(14) 信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英』九 一九八八年九月 同朋舎 三八ページ。註1の一二二ページ。

(15) 註1の五四ページ。

(16) 註1の二九二ページ。

蓮如上人の絵伝と絵解き本

(17) 註6に同じ。

(18) 下中邦彦編『愛知県の地名』―日本歴史地名大系二三― 一九八一年十一月 平凡社 七八五・七八七ページ。

(19) 註18の六三九ページでは慶長十年（一六〇五）、左書では正保元年（一六四四）のことという。

蓮如さん平座の会編『蓮如さん―ゆかりのお寺と寺宝―』一九九六年八月『蓮如さん平座の会』記念誌編集委員会
二四ページ。

(20) 註1の一三二ページ。

(21) 赤井達郎「絵伝と蓮如」（『日本美術工芸』七〇〇）一九九七年一月。

同「蓮如上人絵伝」（『講座蓮如』二所収）一九九七年三月 平凡社 二四一ページ。

(22) このあたりにつき註14の三六―七ページで、早島有毅氏は「各場面を区分するやり霞の彩色が中世のものよりやや濃く描かれたり、人物が小さく、しかも風景描写の技法が近世江戸時代に入ってからと想定できるので、あるいは絵伝だけ時代が降るのかもしれない。（中略）天正八年（一五八〇）までの顕如の筆勢、たとえば金沢市専光寺蔵の顕如書状と比較してみると、やや弱い。だが、筆跡・花押ともに顕如と見てよいのではなからうか。」とし絵と裏書が合致しないとの見方を示しておられる。

(23) 註1の四四―四六ページ。

安城市歴史博物館編『蓮如上人―復興の生涯―』一九九五年四月 安城歴史博物館 四八―四九ページ。

(24) 三河地域における蓮如上人絵伝の残存状況は、調査が行届いているせいもあるが、全国の約五分の一にあたる四十点近くが存在する。

(25) 「西端の蓮如さん」については、『三河堤』、『三河国名所図絵』、『蓮如上人御隠棲実記』等々の江戸時代末期の文献にも「近国の徒群参して恰も市の如し」、「国中群参 門前市町ヲナセリ」などと記されており、そのにぎわいぶりは昭和三十年代前半まで続いた。

(26) 本誌に翻刻の『蓮如上人御伝絵記』参照。

(27) 註5の太子山上宮寺縁起絵伝第三幅目最下段札銘に「応仁二十四丁酉夏四月十五日從三河国油淵化児出現」とあり、上宮寺の佐々木如光が応永二十四年（一四一七）西端の油ヶ淵で出生したことをあらわす。

(28) 註6・7に同じ。

(29) 像容より推し岡崎市勝蓮寺、犬山市浄誓寺などに所蔵されているものと近いようにおもわれる。

信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英』八 一九八八年六月 同朋舎 一四―一七ページ。

(30) この太子像は豊田市皆福寺蔵に代表される侍臣をともしなわないいわゆる真宗の顕仏法威徳太子像に属する。

同右七 一九八九年二月 同朋舎 二五ページ。

(31) 円光を背負い合掌しながら蓮台上に立つこのような法然上人像は、建久九年(一一九八)五月二日に上人が、半金色の善導大師と夢中で対面したさいの像姿で、浄土宗寺院に多く所蔵される

同右六 一九八八年四月 同朋舎 一五ページ。

(32) 西三河地域の西派寺院は、大半この時期に東派より転じたもので、上宮寺もしくは勝鬘寺門徒から離脱している。

(33) 蒲池勢至「三河西端の蓮如絵伝と絵解き―蓮如上人西端伝記―」(渡辺昭五・林雅彦編著『宗祖高僧絵伝(絵解き)集』

伝承文学資料集成一五所収) 一九九六年五月 三弥井書店 七七ページ。

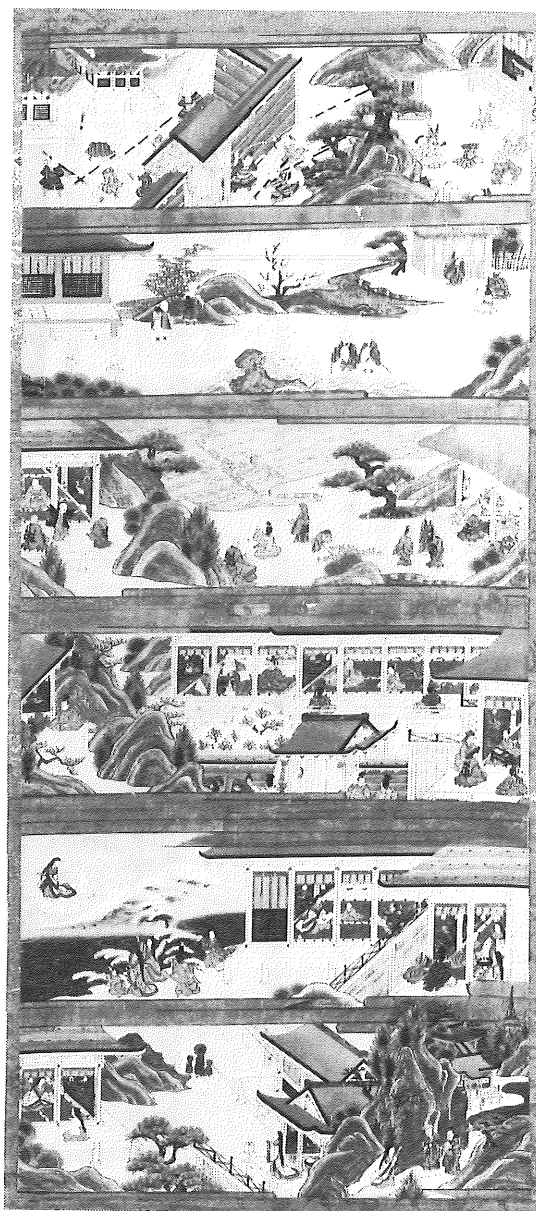
註1の二一ページ。

(34) 大阪北御堂津村別院に戦前まで有名な親鸞・蓮如連坐御影が存したので、「大阪の二尊院と申に宝物と成て残て有る」というのは、それを指すのかもしれない。

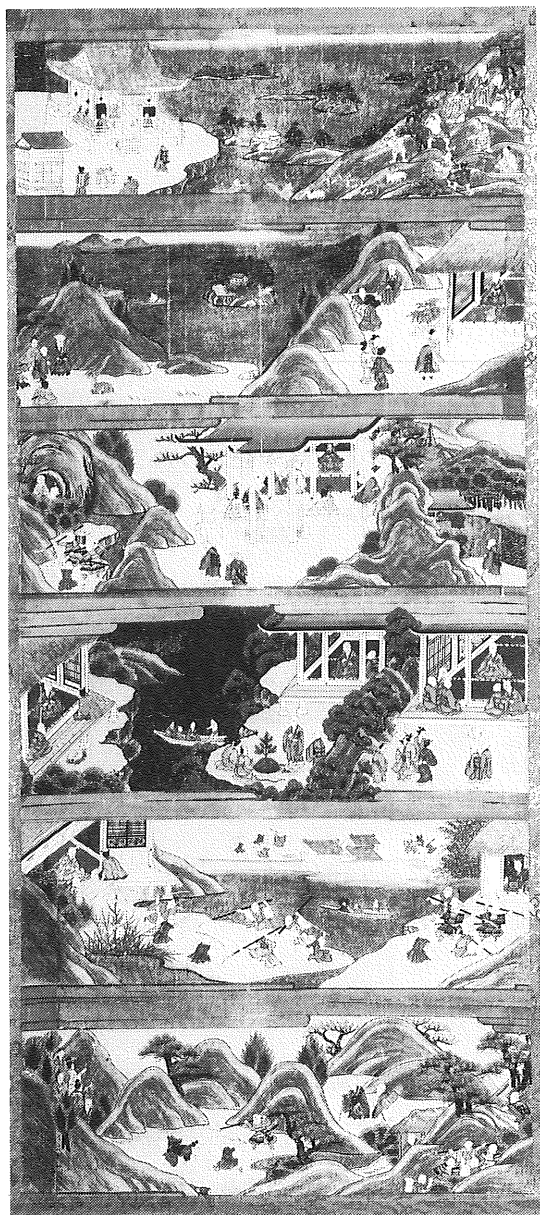
鷲尾教導編著『増補津村別院誌』一九八三年十月複刻 本願寺津村別院 二四一ページ以下。

(35) 註33の八〇ページにおいて蒲池氏は「原田告次氏・杉浦後四郎氏、若月藤太郎氏」と記しておられるが、「告次」は「告

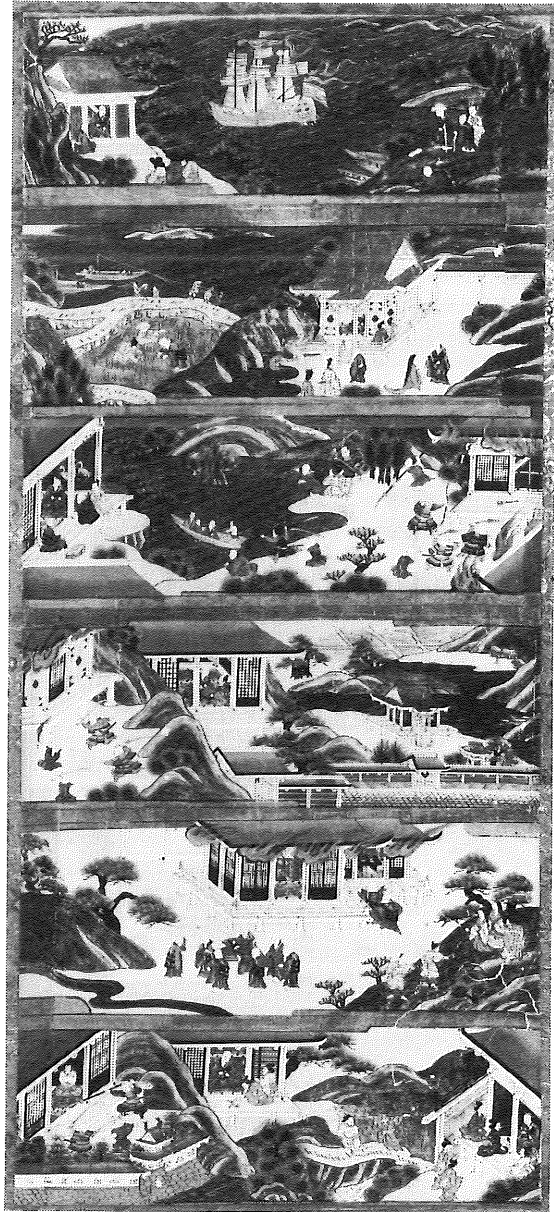
治」、「後四郎」は「五四郎」、「若月」は「岩月」のそれぞれ誤りである。



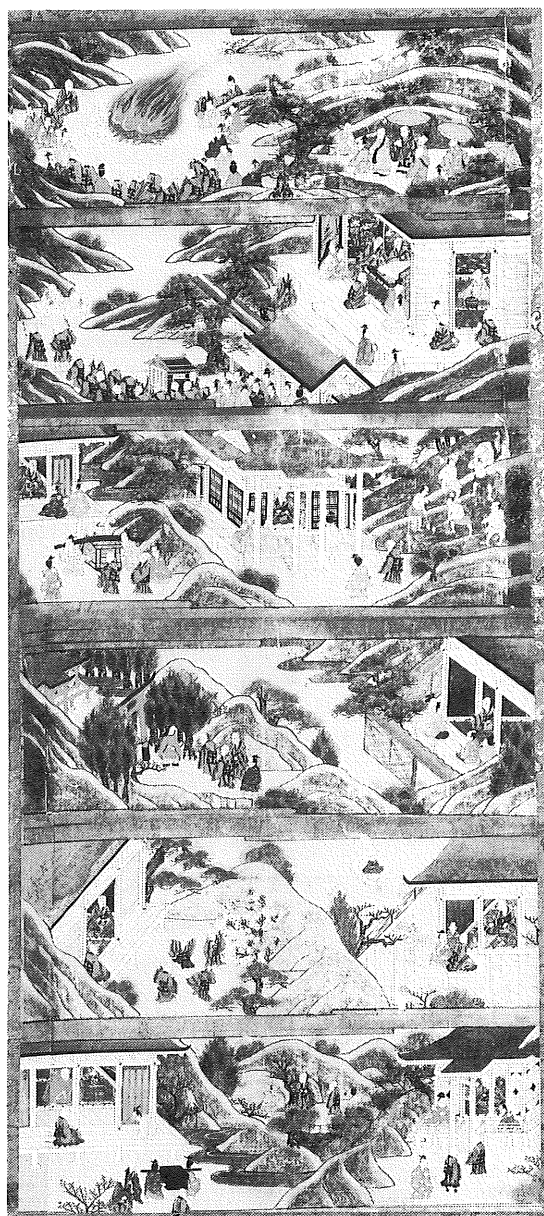
第一幅



第二幅

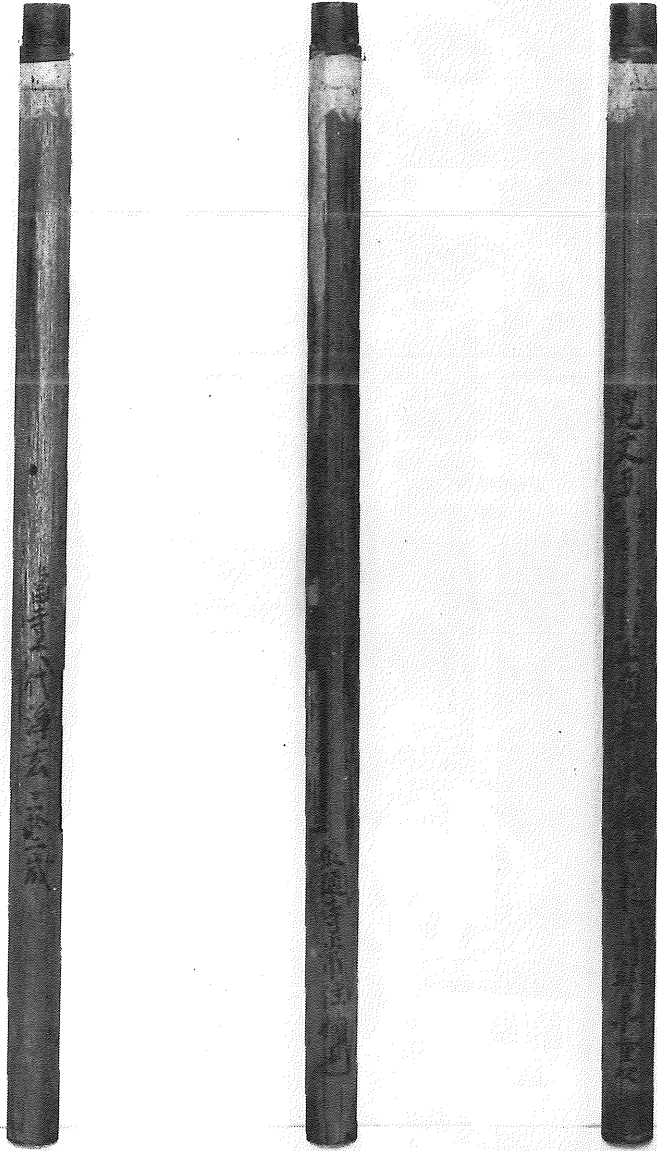


第三幅

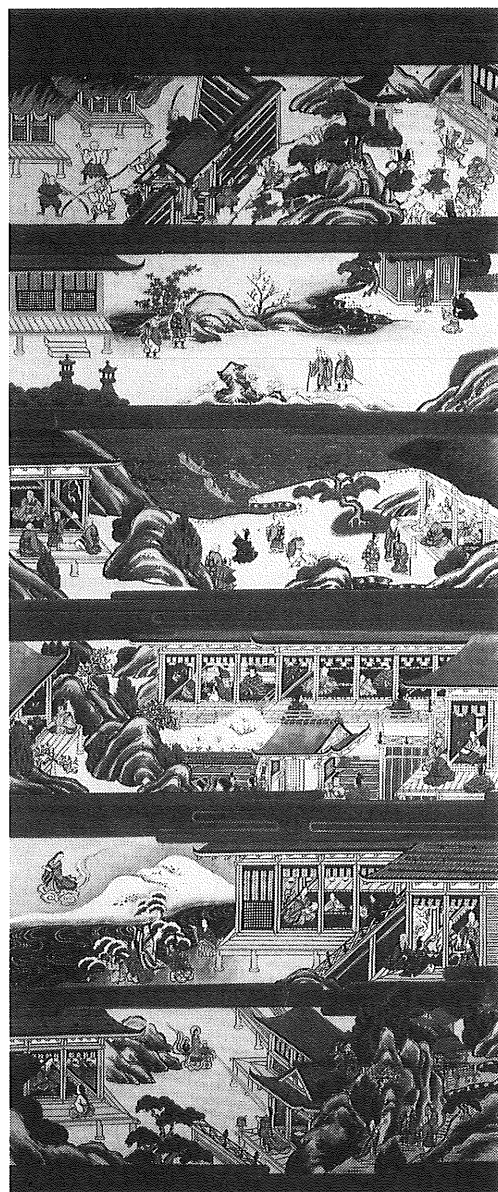


第四幅

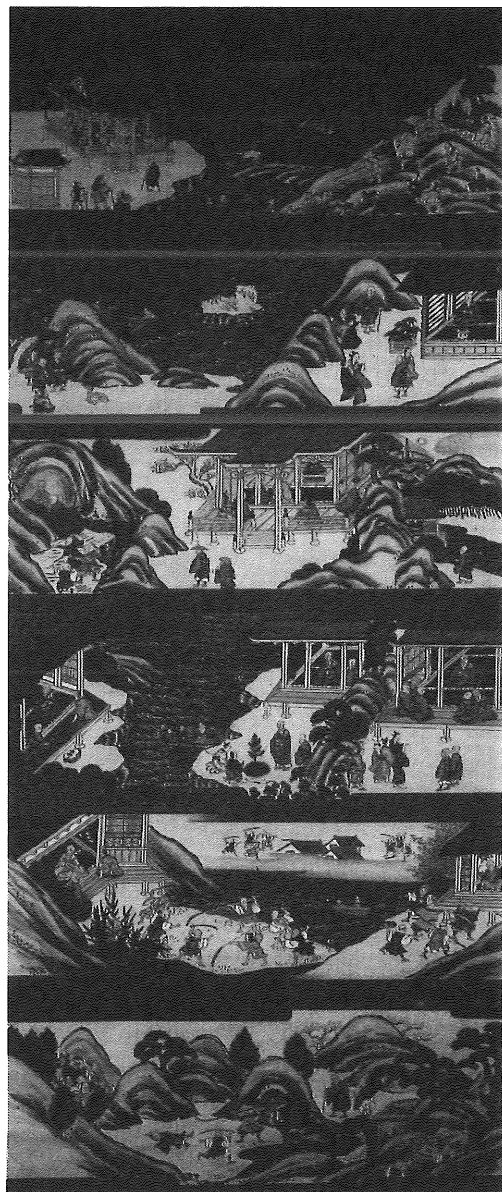
図版二 軸木墨書 願隋寺蔵



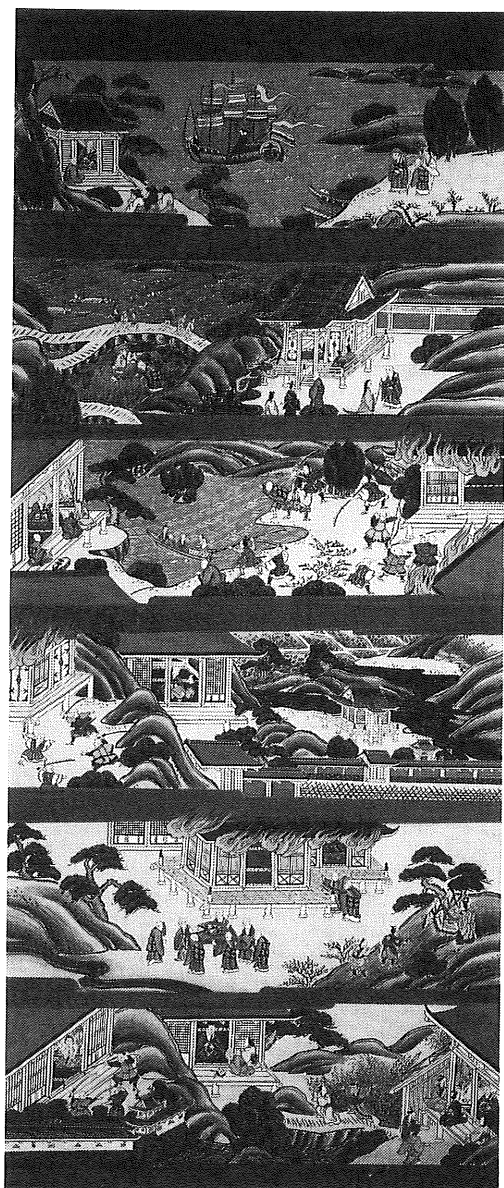
蓮如上人の絵伝と絵解き本



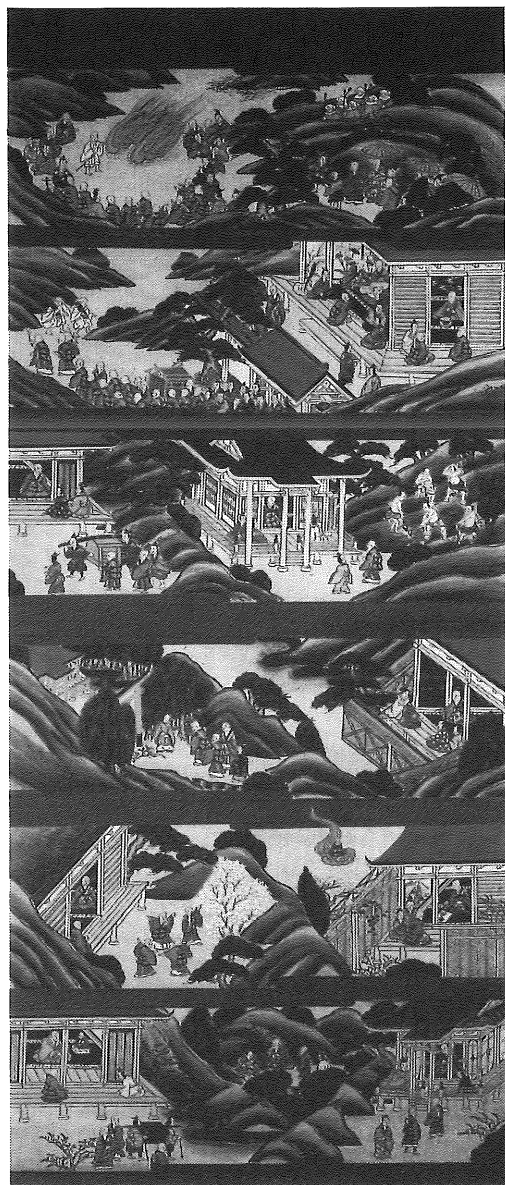
第一幅



第二幅

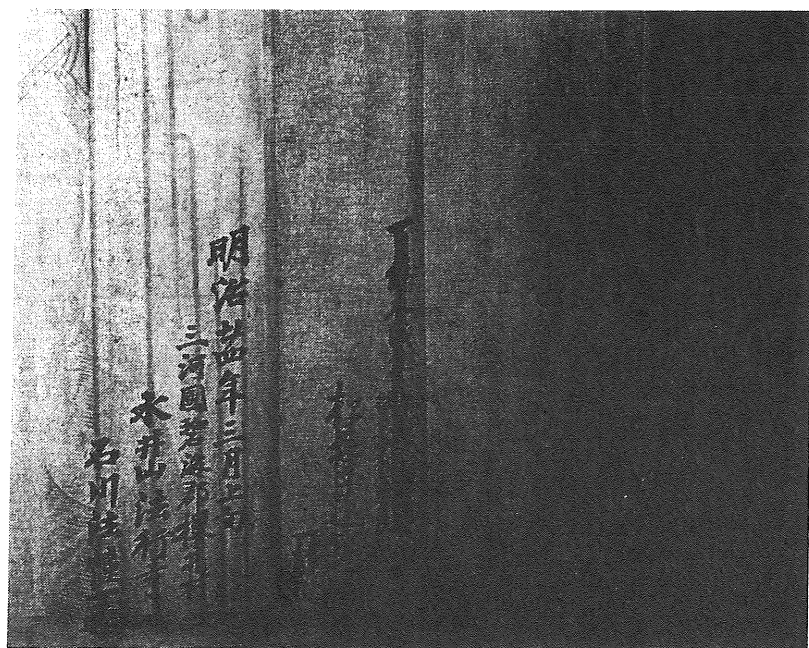


第三幅



第四幅

図版四 蓮如上人絵伝裏書 法行寺蔵



蓮如上人御傳繪

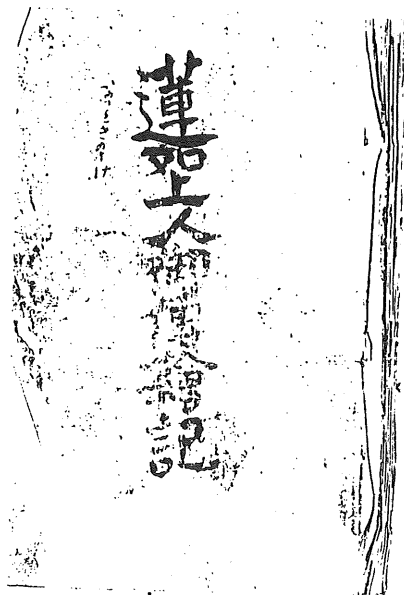
記之上卷

蓮如上人御傳繪

記之下卷

られだであらふをなら受けた清恩の高令一さる姫や南
天所託佛く 擲りかゝる我出とは取らで流の船なく船
人仕せておゆく極樂は日々は近くは成りけり あれれ姫
しや老の暮かな早や多き夜は三邊の晝休時腹の泊り
は極樂が宿なりも余餘りなほ御待ちしうけの御清土とは
備てもうれしや清思とふとや南无阿弥陀佛く

図版六 蓮如上人御伝絵記 康順寺蔵



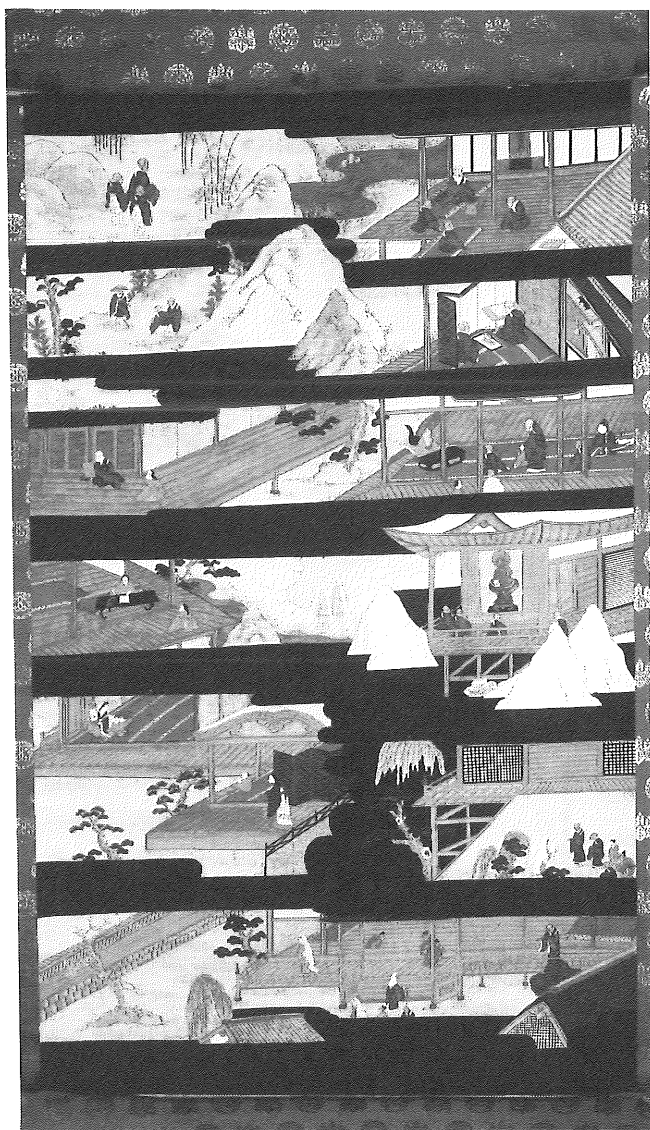
蓮如上人の絵伝と絵解き本

蓮如上人の御伝絵記
 蓮如上人の御伝絵記
 蓮如上人の御伝絵記

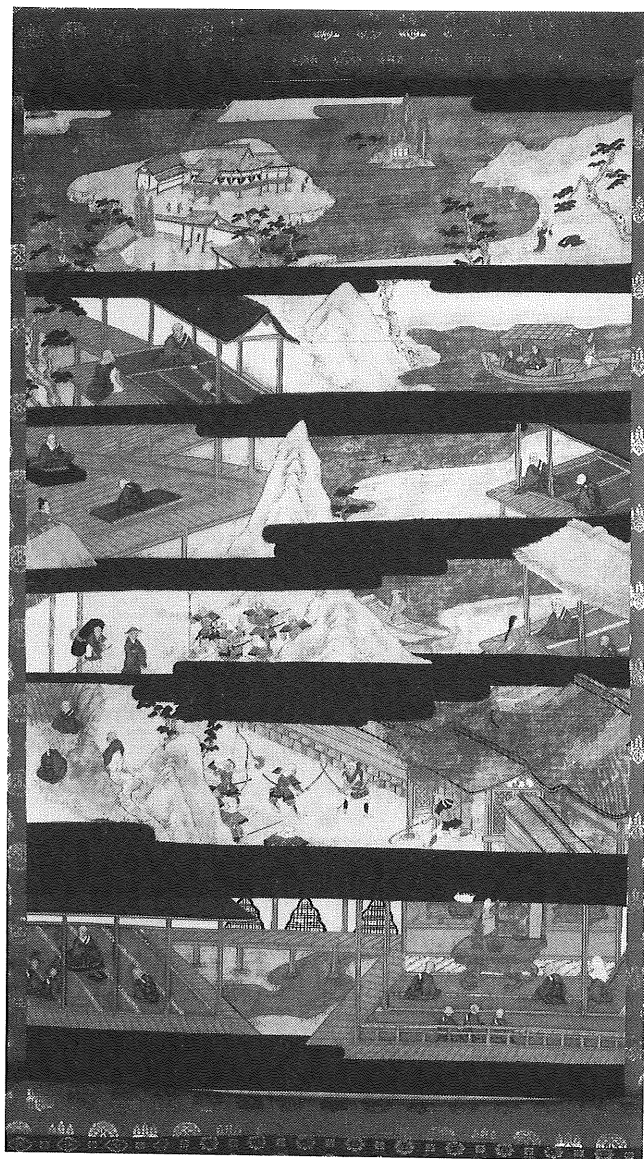
昭和三年十月五日
 病中謹言
 鳥居 清治

蓮如上人の絵伝と絵解き本

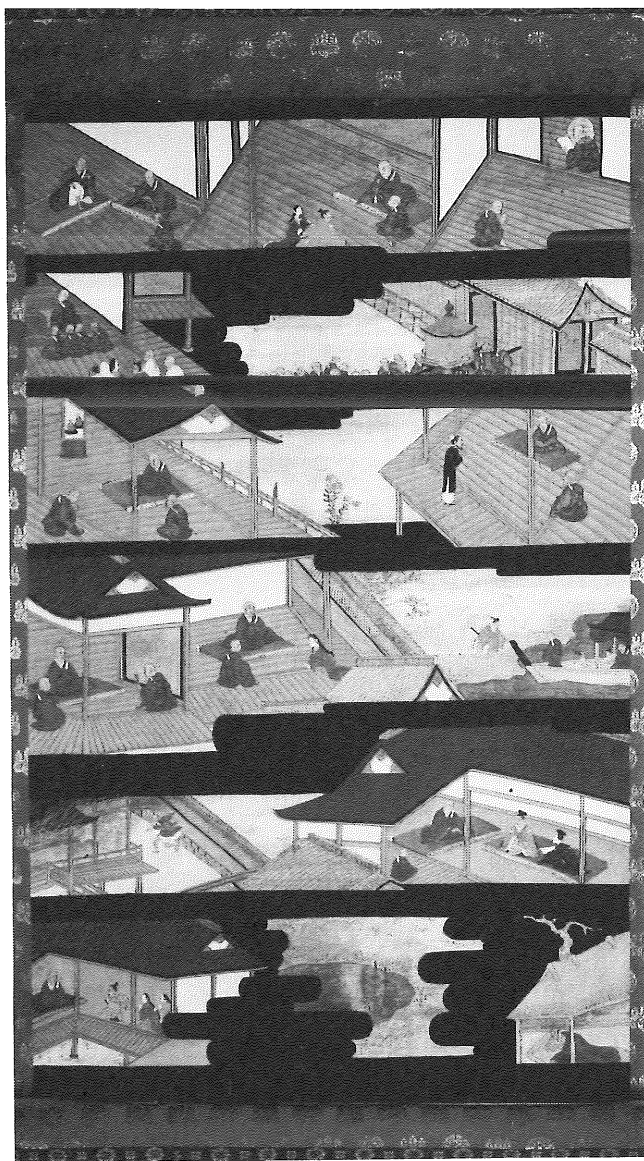
図版七 蓮如上人絵伝 康順寺蔵



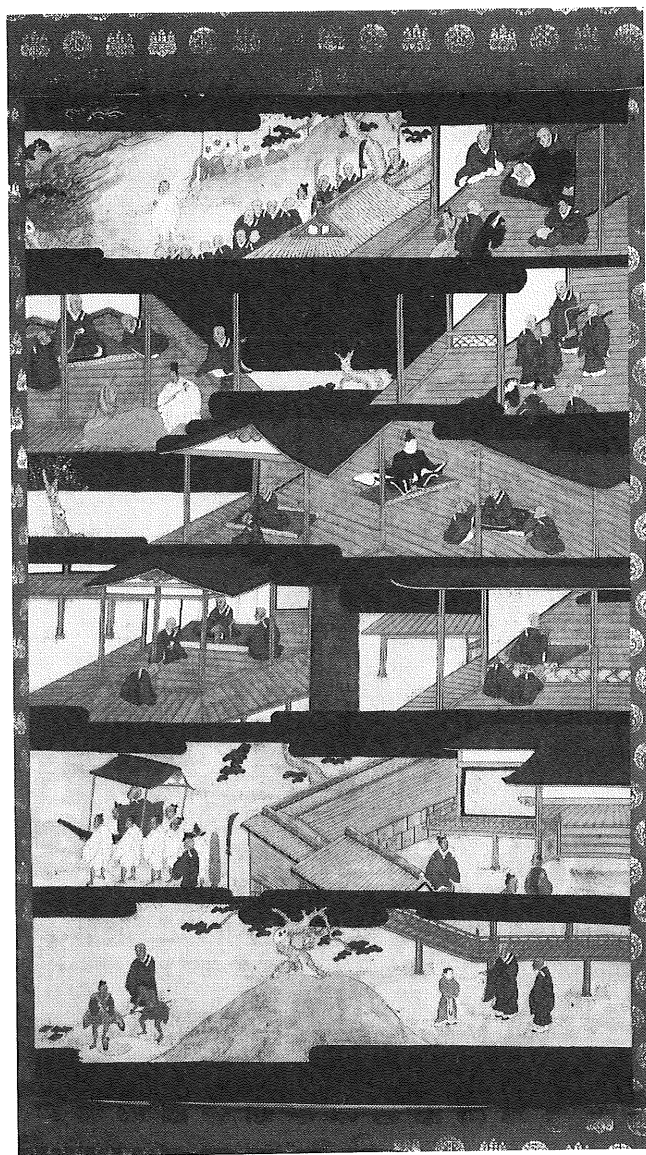
第一幅



第二幅



第三幅



第四幅

凡 例

- 一、ここに翻刻の『蓮如上人御伝絵記』（一九二八年写）は、碧南市札木町康順寺所蔵のもので、同寺蔵蓮如上人絵伝四幅（一八九二年写）の絵解き本である。
- 二、翻刻にあたり仮名使いは原本のままとしたが、旧漢字は新漢字に改めた。
- 三、読み易さを考慮して、句読点に相当する箇所を一字空けとした。
- 四、誤字とみられるものには、右（ ）内に正字を入れた。
- 五、本文中の（ ）内の文字は、補字した方が読み易いと判断したものである。
- 六、文中に差別的表現が一部存在するが、歴史資料として改変せずそのままとした。

蓮如上人御伝絵記

西端康順寺蓮如上人四幅伝

植木のいわれ

拝み上げ奉る四幅の御画伝は 蓮如上人御一代の間 吾^レが為に かゝる御苦労下されたるを、実如上人願し遊はさせられたる御画像にして 先づ是なる初幅の初段は 大谷本願寺の躰相にして 只今とは違ひわづかに阿弥(陀)堂が三間四面 御真影堂は五間四面といふような小さひ御本堂にて 御椽の内や御庭の辺にちらりと居らるゝは 近国遠国より遙るゝと御本山へ参詣の者にして 向ふうの五疊台のそばに立かゝりて御出なさるゝは 本願寺七代目の善知識存如上人 只今は五疊台の上より 自らすべり下させられて 参詣の者へ御化導なさるゝ御相 各々方近国遠国より遙々と歩(み) 本山へ参詣致されたは 実に奇特の至りであるぞや 爾し其参詣致されたる心中が千万心元ない 此存如が勧(む)る弥陀の本願の謂を聞(け)よ信ぜよやと 御親切なる御化導の御相さて あそこに梅を一本御書(き)なされたは 梅は一花を咲(い)て春陽の春を知ると言ふて 時を知らせる為 今 存如上人の御化導なさるゝは 春であるといふ事を知らせてくだされたもの 又 椽のそばに松を御書(き)なされたは 十八公の松といふて 第

十八願を表し上げたものなり 松と言ふ字は ぐずして見れば十八の公とかく 今 善知識の御化導は 弥陀本願四十八通り有るといへども 其内第十八番目の本願を御勧めくださるゝぞよといふことを知らしてぢや 又 其下に柳を御書なされたは 聞(く) よふを御教へて下されたものぢや 柳と言ふものは どちらから吹来る風にも逆らはぬもので 順かつて暮 今 善知識の御化導を聴聞するも其通り とかくに阿弥陀様の仰せにさからはず 仰せ通りに順ふて信するばかりぢやぞよといふことを知らしてくだされたのぢや

式 段 目

存如上人石山へ御参詣奇
女ニ逢玉フ

あれなる所は 存如上人御弟子を連れて 石山へ御参詣の御相 御庭近(く)御出なさるゝ、向ふの方から 一人の女 手に白蓮を持(ち) 身には白絹をかぶりて 御身近く居られて 御方は本願寺の善知識存如上人様と御見受け申しますが 是なる花を一本差上(げ)ます 此後一子ありました時は 是なる花を持て名を御付なされと差出(し)たるを見て 存如上人 是は今は春であるに蓮の花とは珍らしひ 汝は何処の者ぢや、と御尋ねなされたれば 女 私は備後の国斧路といふ処が出生で御座ります 只今は子細ありて 此の石山の辺に往居致す者で御座りますと答ふて 其場を書(き) 消す如くなくなりて仕舞(わ)せられた 是は石山の観音様に相違なひと申ぢや 夫れより元の御本山へ御帰りな

御母は大納言信吉卿の御
息女なり

されて 後の時に蓮の公様と云ふ御方を妻に御貰ひなされて 三々九度も首尾能くすませ
られ 夫婦のかたらひてなされたら つひに御奥様が懐胎の身とならせられ 御身堅固に
して日送り玉ふに 早翌年となり 頃は人皇百二代称光院と云(ふ) 天子様の御時代にし
て 応永二十二年二月二十四日の夜となると 金ヶ森と云(ふ) 所に弥七と云(ふ) 懇志
なる同行ありて 其弥七夜分床に入て寝て居ると 枕元へ古への御開山がありありと御出
なされて御告(げ)なさる、弥七やゝはづかしながら亦参りたぞやと仰せらる、
弥七不思議に思ふて 夜のあけるを待(ち)兼て 御本山へかけつけ 勝手の方に下妻の
安芸の法眼が居らるゝによりて 其事を語ると 法眼も 私も其通り御告(げ)を蒙りま
した さすれば何でも今度は 御開山が此娑婆へ二度御出ましになるに相違なひと言ふて
居ると 早奥の方より御女中が 只今奥様が玉のよふな男子を御出産になりました とい
ふて来り 聞いた兩人は 驚り上りて喜び 法眼へ弥七殿へ御前や私しが 余り浅ましく
日暮(し)を仕て居るで 古への御開山が 今は此度へ二夕度御出ましなされ 此後は吾々
は直々の御化導を蒙むと思(わ)ば 喜しひではないか 有難(い)でなひかと諸手を
打て喜ばれたとある 是が蓮如上人この娑婆へ始めて御出ましなされた時ちやとある 御
生れなされた御子に早速産湯をさしあげて 御名を布袋丸幸亭と御つけなされた 其後ち
は ちよ(う)よ花よと御育(て)なされ 早やあの所ては 御年二才と御成なされ 御

恋しくばたづねきてみよ
からはしの石立山は母の
ふるさと

殿の西の間に御出ましなされて 西方を向て 初声に南无阿弥陀仏くと御称へなされた
御相 か様に聴聞して見れば 阿弥陀様と観音様と極楽でうまひ相談なされて かゝる御
苦勞下さるゝは 何方の物づきなぐさみとは思ふぢやなひ みんな私し故と存せられたら
何れも御恩の称名もろとも拝札を遂げられよふ

偕て あれなるは最早布袋丸様六歳と御成りなされ 御母様かが鹿の子の小袖と着替え
させられなされて 其相を画工を招きて 其通り写せられ 今は見くらべて御座らせられ
あの場に於て親子恩愛分れの言葉を御告つげなさるゝ 布袋丸やくや 私は御前が為には
真実の親なれば 何時がいつまでも御前のそばに居て 養育をせるが当り前なれども 私
はそふいふ訳には行かぬ身の上ぢや 故此一軸をば 汝が形見として持ち 帰る 吾が
なき後とにをひては 勢出して手習をし学問をして 後ちに出家得度して 今は真宗が大
にすたれて居る故に 汝一生懸命になりて 此真宗を引立るぢやぞよと仰せられて あの
一軸の上に布袋丸様の未来記を自ら書せられ 本名を布袋と名付く 名乗りをば幸亭と号
す 六歳にして母にはなる 正に明応八年八十五歳にて終るべし と御書なされ 其一軸
を御持なされて 御殿の西のつま戸を明けて 何国ともなく行て仕舞い なされた 若
様は御庭の内までは あとをしとふて御出なされたが もふどこへ御出なされたか分から
ぬ故 をひくと泣て御出なさるゝを 御女中が御見受け申して 若様は其よになぜ御

十三番石山へ尋ね行のち
の世を願ふ心はかるくと
も仏のちかい重き石山

泣(き)なさるゝと申せば 御母様がどこへか行て御仕舞ひなされた と云ふて居りや^ち
やれる故 女中方はそれは大変な事ぢやと言て 手分けをして御尋ね申(し)ても一向相
分らず 夫より本山に於ては 円明坊 理空坊 丹空といふ三人の御寺様が 都の内を手
分けをして御さがし申(し)ても どふしても分らぬ故 夫より三人同道して 石山へ尋
ね行て 住僧に御前様は本願寺の奥様は御存知は御座りませんかと云(へ)は 住僧 私
は其の様な人は 一向存じませんと答られ そんなら君は何ぞ不審なことは御座りませ
かと云(へ)は 只今 この所でゆび折り数うれば 六年手前の事であるが 俄に此石山
が震動して をそろしく宮殿がうなづひた故 早速御みづしの戸を開けば 何時の間にや
ら 御身躰が抜けて御仕舞(い)なされた故 其時に私大に心配を致しましたが 其夜に
入て観音様が御告なされた故 安心いたしました 其告げは 汝必ずあんじるなよ 今は
子細ありて京都東山に暫く住居して居る故 安心して暮らせよと告げなされた 今回又々
庭前元の如く震動致しました故 不審に思ふて居る所て御座る 今日只今より一度御身体
を拝せ下されと言(え)ば あのように住僧御扉を開(い)て 四人連れで拝み上る所
御別れなされるときに御持(ち)なされた一軸を観音様がちや(ん)と持つて居らせらる
故 四人諸共に 左様なれば本願寺の奥様は いよく石山の観音様であつたかとあされ
かへり 恐れ入て拝礼を遂けて居らるゝあの御相た かよふに聴聞して見れば 蓮如様の

本地の極樂の阿弥陀様 観音様と御相談の上 かゝる御苦勞は みんな私一人を助けんとての御苦勞ぞと存ぜられたら 今 この御苦勞の御相たを拝み上るに付ても 仏恩の称名となへ上げては 南无阿弥陀仏く

偕て あの所では 御年七歳と御なりなされて 藤原の中納言仲司外記と云人を師匠と御頼みなされて 始(め)て御手習(い)をなさるゝ御相た

第四段目

又 其上の北の処は 御年十七歳と御成りなされて 古例を以て栗田口青蓮院に於て 御得度の御相た 正座に衣を着させられ 前に黒き台を置(い)て居らせらるるは 青蓮院の御門跡蓮心大僧正 天台の得度の式には 四句の文を三度称へるが御定(ま)り 流転三界中 恩愛不能断 棄^キ恩入無為 眞実報恩謝と三度御称へなされ 御つもりを御そりなさるゝは 大僧正の第一の御弟子が御そりなさるゝ 夫れまでの御幼名は 布袋丸幸亭と申したが 得度なされてより 仮名が中納言 法名は兼寿と御名乗り遊ばして 夫より間もなく比叡山へ御出なされ 大乘院へ御入なされて 今は月光と云て 月の光りを以て御本書を御覧なさるゝ御相

第五段目

又 其上の北の所は 慶聞坊を使に御遣りなされて 黒木を買求 ゆろりの中で御たきな
され 其もへる火の明るで 御開山御真筆の御聖教を御覧なされて 正信偈の大意と云
(ふ) 書物を御認めなさる、御相 夫れより永々の叡山の御修行終らせられ 元の都へ御
帰りなされて 心の中で思(わ) せらる、には 古へ御開山様は 御年三十五歳にして
南都北嶺の悪僧がねたみにより 遠き越後国の国府へ五ヶ年が間 御流罪の御身とならせ
られ 今 兼寿も丁度今年が三十五歳と相成り せめてはくあなたの御跡を慕ふてなり
とも 御恩が報じたひと思(わ) せられ 先づ都にありて御身仕度は 拝み上(げ) 奉る
通り 御身には墨の衣に墨の袈裟 御つむりにはあじろの笠を冠らせられ 御手には竹の
杖を御つきなせられ 御足には脚半キヤンをめさせられ ごんすわらんじを御はきなされ 花の
都をば後に御覧成され 慶聞坊や道西坊などを御連れなされ 御化導かたぐい遙々と御出
ましなされたは 是なるが越前国は 荒地の山血塩の松 今はいくりつと後とを向せられ
御弟子に御咄しなさる、 古へ御開山様が此所へ御出なされ 是なる荒地の山をあちらへ
越へ こちらへ越(へ) 御化導なされ 或時に御つかれの余り 是なる松の根で暫く御休
みなされ 御めあし(あ)を御らんなされると 御足から赤けの血塩が だら／＼と流れ出たと
有 其時に一首の御歌を御詠みなされ なにしを荒地の山に行き勞れ 足も血しほに染し

斗りを　と御詠なされ　夫より此所は御立なされて　又　上の所は　北国で名高ひ七不思議の一け所　鳥屋野^{トヤノ}の逆竹へ御出ましなされた　又　あとを御向きなされて　御弟子に御咄なさる、　古へ御開山が此の所へ最初御出なされて　あちらこちらと御化導なされても兎角何方^{アナタ}の御化導になびくものがなかった故　其時に御なげきなされて　一首御詠みなされ　此里に親の死したる子はなきか　御法の風になびく人はなからんと　それでもこりもなされず　又してもく御教化なされ　つひに何方^{アナタ}の御一念で聞者は出来けれども　疑ひ深いものが多(く)て信するものがまれない故　御開山の仰せらるゝには　此親鸞勸むる法は　うそでなひぞや　いつわりではなひぞや　地獄が有るに違ひない　極楽は有(る)に相違なひ　其証拠は此に残して置くぞよと仰せられ　親鸞が日日付ひた此竹の杖　最早根葉が枯れ切て　縁はつきて居るけれども　此大地に挿して置けば　必ず根葉が生して元の如く青くゝとあるぞよ　それを眺めたものの疑をはらして呉れよと　御差しなされた竹の杖今にをひて此の様に青くゝとなりて居る故に　是を眺めても疑は晴らさにやならんぞよと仰せらるゝ　それより又北の角の所は　御化導かたくゝ段々と御出なされ　加州の国井振橋の法海坊の宅へ御出なされ　爰には恵信僧都^{ケイシン}の御真筆にて　三方正面の阿弥陀様の御影が御座らせらるゝ故　師弟もろとも御参りなされ　御念^{ミツメ}ごろなる勤行を御つとめなされてそれより又後とさがりなされ　法海坊へ御化導なされ　喜びの余りに法海坊が　笹のちま

きを差上た故　今は御あがりなされて　又々御化導あそばす　夫よりあちらこちらと御回りなさるゝ　その内都に於て　御父存如上人長録（録）元年六月十六日に御かくれなされた故御伯父様より呼びかゝりて　二度元の都へ御帰りなされた　何様に聴聞して見れば　蓮如様の本地は　阿弥陀如来　其阿弥陀如来様が　かゝる御相たの御苦勞は　あなたの物ずきなくさみとは思ふではない　みんな私故と存ぜられたであろふぞなら　今　此御画像を拝み上げるに付ても　いづれも御恩の称名もろともに大切に拝礼を遂げら（れ）ましよう

二　幅　目

是なる二幅目の初段は　南の方は金ヶ森の道西坊と云御弟子が　御師匠の御前にすゝみ出て申（す）　御師匠様私は是までは　あなたのそばへ度々参りまして　尊ひ御化導を聴聞いたしました　今日では追々年を重ねました故に　是までのよふには参り兼ます故　願（わ）くば何か有難ひものを一通御認め下されと御願（ひ）を申（し）たら　取敢（へ）ず聖人一流の御文を書（ひ）て御やりなされた　道西は押（し）頂て頂戴をいたし申（く）御師匠様　かよふな結構なものを頂きまして　有難御座ります　是は金言と申してよろしゆふ御座りますか　又は御聖教と申（し）ましょふかと御尋ね申（し）たら　御師匠様が道西やゝ金言と云（ふ）ては恐れあり　聖教と云（ふ）ては如何にも学文あるに聞へて

よろしならんぞや 如何なる愚かなるものでも 分り安き^易よふかな交りにて認(め)た故
是は文と云ぢやぞよと仰せられた そこで各々方 御文様く^と云ふは 此時蓮如様が
みづから仰せられて名が付ひたと申ことぢや

偕 又 其北の所は 存如上人長録^存元年六月十八日に御往生なされた故 只今は中院の御
法事を御すましなされて 其後とで八代目御相統を御きめなされる所 先上のこちらの方
に居らせらるゝが 兼寿中納言 向の方に居らせらるは 弟の応玄法師 其そばに居らせ
らるゝは 継母様の五月前 法名は如円尼公 そこで何方でもまゝ子となると 少しは心
がへだつものと見へて 継母は是なる弟を以て 八代目を統^統がするがよろしひと仰せら
るゝ 其時あの下に居らせらるゝ真中の御坊が 伯父で加賀国の本泉寺様 其事を御聞き
なされて それはよろしう御座らん 兼て七代目より我が無き後では 必ず兼寿を以て八
代目はつがせ呉れよと仰せられて 私が書きもの迄頂戴いたして居ります故 是非共左様
になされねばならぬと仰せられた故 不得止 あなた兩人は 隠居の身と御なりなされ
夫より改(め)て八代目善知識と御なりなされ 自ら蓮如上人と御名乗りなされて 八十
五歳まで永々御化導の御苦勞下された故 一たんすたれた此真宗が 元の如く引立 此よ
ふに御繁昌と相成りたは 偏へに蓮如上人の御蔭ぞと存ぜられたであろふぞなら 何れも
御恩の称名諸共謹で拝礼を遂げられよふ

式段目

大谷本願寺惡僧の爲メ御
焼失の事

如光坊の事富豪家にて杉
浦三良左エ門油ヶ淵路傍
ニ遊び居る六才の男子吾
家へ連れ帰り数日の後上
宮寺の僧貫て寺につれ后

二幅目二段の所は、叡山の惡僧が爲に 蓮如上人 大谷本願寺を御焼失の難に御逢ひなさ
る、処 是はどふいふ訳ぢやと云へば 先づ世間に於ても 増せばいどむの道理 出る杭
はうたれる 高ひ木なら風強し 商売敵きといふよふな風情にて 存如様の御時代には
真宗がきへぎであつたから 蓮如様が一生懸命に御なりなされて 此真宗を引立て下さ
れた故 追々御繁昌と相成 天子様まで玉の冠りをかたげて 御帰依になりたる故 其相
を眺めて惡僧が 己れ憎ひ蓮如 なんでも一度目^(こゝ)にあはしてやろふと 兼てたくらんで居
た所が 頃は寛正六年の春 文明三年二月十八日上人五十六歳 御堂にて勤行最中 御弟
子方も共に助音を仕て居らせらるゝと 何となく^(が)にや／＼と人声へがせる故 何事ならん
と思ふて居ると あげくの果てには わあゝと時の声を揚げる故 下妻法眼^(前) 如光坊はせ
をのして門外を見れば あらをそろしや 惡僧坊主五百余騎と云ふものが あのと云ふに身
には鎧を着て 目出頭巾をかむり あるひはつく捧 或は鎗 或は長刀 火矢と云物を以
て 一時に攻め寄せたる有様 其を眺め下間安芸の法眼の勤行中の事なれば 衣の上より
身仕度を致し 足装束を仕て 大刀を振り上げ門外へかけ出し それにつゞひて西端油ヶ
淵より出現したる勇力無双の佐々木如光 同じく衣の上に胴巻^{ドマキ}をしめ 大長刀を風車のま
う如くふりまわして 門前^前先へと飛(び)出し 先づ如光坊の方から發言して や、何者

住職となる上人宅寺に一ヶ月余り御滞留まし、其時御弟子となる御眞影ヲ取かへしの時は太田喜左エ門ヲ連レ玉フ

なれば狼籍いたす 盜賊なれば財宝を与へんと発言いたしたら 惡僧に於ては 前に進んだるは 南谷に於て鬼阿闍梨と呼ふそれたる覺祐坊 それにつゞひて覺林坊と云（ふ）や づが先に立 や、をこがましき過言かな 吾々こそは誰ちやと思ふ もつたひなくも天子様の鬼門を守る比叡山に住し僧侶なり 汝等如きは 其比叡山の麓に住（み）ながら 吾が流には順はず 自俣を以て念仏を人に勧め 人の心を迷はかす 是によりて 我が山かすいびに及ぶ 今日では是なる火矢を以て 堂宇残らず焼きはらひ 蓮如もろとも皆殺しにしてくれる それがこわひと思ふなら 吾が山に推參して天台宗となるか どうぢやくと攻め寄る 夫れを眺めた兩人は なにこしやくな惡僧坊主 今に見て居れ 目に物見せんと や、暫くが其間は 東西南北に血路をあけて働くともく 其の勢ひがをびたゞしひ（に）依て 如何なる惡僧も此勢ひでは中くもかなわんぞや 退けくと号令をかけて ぢりくと後もどりをして仕舞（ふ）た 夫れはよかつたが 爰にかなしひことは向ふからいりつけた火矢が あのをよふに天子様から御寄付になった日果門に其の火が移り暫く見て居る間に堂宇残らず一天の煙りともへあがり 残した物は灰斗りのあわれ（な）相たなり 蓮如様致しかたなく 裏の山の上の藪の中に御眞影様諸共隠れて 念仏三昧で居らせらるゝと あれなる堅田の明誓と言ふ御弟子が 蹴上の坂に登り上り 御そへ参りて申く 御師匠様 爰へ参りて見ますれば あなたは念仏三昧で御出なさるゝ、 全体

此度惡僧の爲にどへらひ目に御あひなさゝるは 其念仏が元で御座りますすへき 暫くの間なりとも御たしなんで御出なさるゝと 又 惡僧の心もしばらく休みましょう と御意見を申上げたれば 明誓の顔をじろりと御らんなされて 明誓やゝ 汝は愚かな事を申ぞや 此蓮如は日頃でもさへも称へにやならぬ此御念仏 今惡僧の爲命にかゝわると云(ふ)場合にのぞんで 念仏をやめる所かや 日頃にましても称へにやならぬは^④と仰せられた故 明誓かへ(つ)て御はづかしくなりて 後とへとすば逃げにかへってしまったが 実にかように聞て見れば 御互に蓮如様の御苦勞ゝと云て居るけれども 聞(か)ぬ先きは此のようなことは 知らずに居る吾々が 身にとりては先祖には打死(に) として高枕あなたの御蔭なれば 吾々は畳の上に樂々とすはり込で居て 御化導がいたゞけるぞと思へば 此苦勞の御相たを拝み上るに付ても さても喜しや南无阿弥陀仏ゝ偕て 其の上の南の処は あなた方が山の上なぞでは 夜露が下る故 永居は出来ぬ故夕がたにひそかに御立なされて 御氣毒や 隣り百性屋^⑤の灰部屋へ御眞影様もろともに御隠れなされ 如光坊が灰部屋のそばを通りかゝると 中で御念仏の声が聞る故 のぞひて見れば 御師匠様泪なからに念仏三昧で居せらるゝ 苦し御師匠様 あなたが此の様な所に長居は出来ません 是より粟口の方角をさして御逃げなされと御すゝめ申た故 御身には墨の衣に墨の袈裟 御つむりにはあじろの笠をかむらせられ 御手には数珠をつまぐり

なされ 先に御立なされ 如光坊が あら勿体なや 一天無二の御真影を荒狐に巻(き)て背なに負はせられ こそくと御逃げなさる、 夫れはよかつたが 寔マコトに憎くひは悪僧坊主 此度はえ、ぐわひに堂宇残らず焼き払てやつたが 肝心な蓮如坊主が いづくへまひりたか相分らず まんだ遠く逃る間もなひで 此辺に待伏せして居たら 今にも来るであろふ 今にも来たなら是なる大長刀で切り殺してやろふと 日の岡峠蟬丸谷に待ち伏せして居るを それとも御存知なかつたか 運も悪るけるや 又 出逢ひなされた故 見(る)よりはよふ向から大長刀を以て どふとなげつけた故 それが蓮如様の御足にさわつて 御足の指が切れて 赤けの血塩がたらくと流れ出たとある 其のなげつけた大長刀を早速如光がひろひあげ 前にす、んだ日野律師が首を一つ切り落し 外の悪僧を追ひ散した故 ようくと其場のあやうき難を御しのぎなされて 御通りなされたところ其事を堅田の道流と云(ふ) 御弟子が風の便りに承り 近江の湖水を小船を浮べて御向ひに参り あの船にて 一度は堅田の明誓の宅まで御逃げなされ 御足のきず療治かたく御化導をして御出なさる、と あれなる女が一人進み出て申(す) 蓮如様どうぞ一言御聞せ下されと御願を申したら 蓮如様が 女やくと汝が様な者には よふ聞してはやらんぞやと仰せられ 私は今日わざと参りました故 どうぞ御聞せ下され 汝が様なをそろしひ者には 聞かせんぞよと仰せられたれば 女が腹を立て是ほど頼んでも聞してくれんよ

ふな坊さんなら もふ聞かんでもゑ、もう帰りましようと立にかゝりたか^う 手足がしびれて動く事が出来ぬ そこで蓮如様が 女や／＼汝はそこに何時までもなにをして居るやと御尋ねなされたら あなたがあんまり聞（か）して下されぬ故 帰（ろふ）としても手足がしびれて動かれませんか どふいふもので御座ると云（ふ）たら 汝が目では見へぬけれども 汝が体には尾がはゑ 角がはゑて 蓮如が押へて居る故 動かんぞよと仰せられ夫れはどふいふ事で御座りますと云へば 其事は汝が方がよく知て居るであろふ 知らんと云へば聞してやろふ 汝今吾家を出る時 親と口論をして あげくの果には 親を土足にかけて蹴て来たでなひか 親をけた其足の裏が 今で錢の丸ほど赤くなつて居る 其足は だつさうの如くみなくさつて仕舞ふぞと仰せられ 聞（ひ）て女はびっくり 仰天^{ギョウテン}して あ、蓮如様は生仏様ぢやとは兼て聞（ひ）て居ましたが かふな事まで御存じなさるゝは いよ／＼生仏様ぢや 今日^をは生き如来様の御前へ出なから かくし三昧をして出ました事の勿体なさよと 総身よりは玉のよふな汗を出し 両眼よりはとちのよふな泪をこぼして 自分の悪さをくひ悔で御頼申たら 其相を御覧なされ 哀みの心を発させられ 女や／＼汝はそふいふやさしひ心に成つたから さあ今から聞してやるぞよと仰せられ 汝は親を土足にかけて けるよふな悪人ぢやで 恒沙の諸仏は大蛇を見るときも女人を見るなよと云て 皆御逃げなされたが 此蓮如が勧むる弥陀の本願ばかりは 善人正客

二幅目五ノ次西端エ御下

の本願ぢやなひ 汝がよふな怖ろしひ悪人正客の御本願ぢや故 御もらしはなひ さあ聞
(ひ)て信せよと御ねんごろに御化導に預り 悪につよけりや善にもつよひ 立所に回心
懺悔して有難ひ身の上となり 今は御礼申て我家へ立帰る所て御座ります

夫より如光坊御勧め申して申(す) 御師匠様 只今は都にありては応仁の乱で御座ります
す 山名総仙^(宗全) 細川勝元の乱りの真只中 其中であなたは悪僧の為に暫くも機楽に御休ミ
なさるゝ事の出来ません御身の上 私の国は草深ひ土地では御座りますが 一度御下向あ
りて 御心を御休めなされては如何で御座りますと申(し) 上(げ)たら 成程御前が申
(す) 通りそんなら是より三河国へ参りて世話になろふと仰せられて 如光の案内にて
遙々当国へ御下向なされ 其時はなる西端村に御出なされて御化導下され 或時は作の島
或時は土呂 岡崎 刈谷と云ふよふに所々へ御出なされて御化導下された故 三河の同行
も風に草木の靡くが如く御帰依申(し) 今に至る迄 此様に御繁昌と相成 それから御
師匠様の仰(せ)に 今ゆびをり数へて見れば 三河の国に出入三年ばかり世話になつたが
都の乱さも大ききにをだやかに成た話た又 悪僧にも三年もあわなんだ故 少しは心は休
まつたで有ふ 蓮如は元の都の方角をさして そろ／＼帰るぞよと仰られて 夫よりは又
三河を後に御覧なされ 御化導かた／＼御帰りなされたが 是なるは東江州荒海の門光寺
へ御出なされ 鶉の鳥を御覧なされて 御化導遊はす所 門光寺や／＼あれを見られよ

あの泉水の中に一羽の鳥が面白そふに遊んで居る あれを見て一首浮かんだはやと仰せる、漣にいく度羽をもさらせども 鵜といふ鳥の色の黒さよ

此御歌の御心は その鵜の鳥は毎日毎夜 千波万波の浪立中ちに住居して 水で羽かひを洗（ふ）てく洗祓くけれども 何程洗つても色の黒みは去らん はやあればあの鵜の鳥の生れつきちやで致しかたがなひが 今蓮如が心中が 丁度其通り毎日毎夜 心の羽がひをば法の水で洗ひてくく祓くけれども をぞひしぶとひあさましひ此色の黒とは去らん はやこひつは凡夫の生れは付地生ちや 致し方がなひ こひつ見込んで御立下された弥陀の御本願とは 何たる有難ひ事ではなひかやと 鵜の鳥を縁として御化導の御相

夫はよけ（れ）ども 其頃東海道水口と云ふ駅に浅井又九郎と云ふ叡山回しの悪る者がありて 蓮師の御座る所をさがしに掛りて居て知ると 内報で叡山へつげると 悪僧が何百人といふ程刃物を持て殺しに来る故 其頃は近江国の内を或時は大津 或時は草津 或時は金ヶ森と云ふよふに 所々をかくれて御出なさるゝ故 大津に浜名太郎左エ門と云懇志な同行がありて 三井寺へ欠込み願（ひ）をして 南別莊近松を借り受て 暫く御かくまひ申（し）たが 又々悪僧の為に長らく居らせらるゝ事が出来ぬ故 文明三年初夏上旬ひそかにしのび出でさせらるゝ 其時御真影を三井寺の奥の院へ御預けなされ 只今御別れの御相 一人は浜名

四 段 目

夫より大津打出の浜より やかた船に御乗りなされて 湖水を御渡りなさるゝ 其時船中にて船人相手に御化導なさゝる 御和讃を御讃題となされ 生死の苦海ほとりなし 久しくしずめる我等をば 弥陀弘誓の船のみぞ のせて必ず渡しける 船人やゝ弥陀の本願の大船に乗(り)込(む)は 我が力で乗(る)とは思ふな 我はからひはいらんぞや 弥陀観音大勢至 大願の船に乗じてぞ 生死の海にうかみつゝ 有情をよぼふて乗せたまふ 乗(つ)て渡ると思ふな 乗せて必ず渡しける 丸々他力の御法りぢやが なんと船人有難(い)では御座らんか 喜^喜しいではなひかと船人相手に御化導かたゝ 湖水を今は御渡りなさるゝ御相 何れも御恩の称名もろとも謹で拝礼

夫より陸へ御上りなされて 御化導かたゝ二度北国へ御下向なされ あの所は藤島超勝寺に於て御化導なさるゝところ あれなる禪宗の学者川尻勝光坊と云(ふ)坊さんが 姑み心を発して 此度藤島へ都より蓮如といふ者が来りて 念仏を人に勧め人の心を迷はかす 全体蓮如と云ふ坊主はどの位力がある 一度超勝寺へ参りて法論をしてやろふ 其時すみやかに答へたらかんべんしてやろふ 若し一言でも答へが出来なんなら 直に都へ追ひ返してやろふと言って 今は自分の方から押しかけて来て 立板に水を流す如く法論を仕掛くる 御弟子はあごを差出して あきれて見て御座る 御師匠は一言も御相手に御なり

なされず 念仏三昧の其合に一言づ、念仏の尊ひ事を言て御出なさる、^(性)勝光は相手なく
ては論は出来ず 一人りしやべりにしやべり勞れてだまつて居ると 蓮如様の仰せらる、
事が耳にちろつと這入たが因縁の端となり 遂には心の頭べがうなたれて やれく^(喜)喜し
や有難や 今此勝光は禪宗ぢやで 我が力て証を開かねば未来安心は出来ぬのに 蓮如上
人の仰せを聞けば 未来が他力で仏になられるとは 何たる有難(い)事ぢや と夫より
つひに蓮如様に御順ひ申して 其場で御勧めに預り 川尻勝光坊へ々々所へ氣が付く^(く)
ぞや 御前は此世に於ては禪宗の大学者 弟子の五百人もあるふといふよふな学者ぢやで
どこへ参りても大先生ぢや 大和尚ぢやと人に敬(ま)われ 正座二直りていつも敬まは
れ 誠に此世は結構ぢやが 折角坊さんに生れながら 此世ばかりでは 残り多ひ行く先
きも共によひ所へ行かねばならぬ 夫について御前は 少しばかり学文を鼻に上げて 蓮
如と法論をせよふの まけたら都へ追ひ返そふのといふよふな 我慢偏執の心をいだひて
来るよふなやつぢやで 諸仏は悪人ほど怖しものはなひと御逃(げ)なされて まあ助る
縁のなき汝ぢやが 我が勧むる弥陀の本願斗りは善人相手と思ふな 聖者相手と思ふな
汝がよふな悪人が弥陀の本願の正客 御もらしはなひ 聞て信ずるばかりにて 未来必
(ず) 御助け下さる、ぞよと御懇なる御勧めに預り 悪つよけりや善にもつよひ たちま
ち改悔懺悔の心ををこして 有難ひ身の上となられた 其時一通御認めなされた御文に

此方川尻性光門徒の面々にをひては 仏法の信心の心得は いかよふなるらん 誠に以て心元なしと云一通御製作なされた

五 段 目

吉崎御坊の事

さて あの上の所は 越前に於て領主朝倉様を始めとして 大勢の同行懇志によりて 出来あがつた吉崎の御坊の体相 まづ一番大きなのが御本堂 正面が御門 かたわらに有るが寺中の本覚寺 門外にある家は多家しろの坊 向ふ角の所は塩汲みの浜 海の中に見へるは鹿島明神様の社 そこで此吉崎の御化導の時は 加賀 越中 能登 越後 信濃 出羽 奥州より参詣して あらゆる御繁昌で有りたが 其時に当りて 北の角が古へより名高ひ嫁をどしの体相 あれはどういふ訳ぢやといふと 立ちかゝつて居るは 内の姑め婆々さ 前にはいかゞんで居るは内の嫁 あの嫁は名は松代と云者で 已前は越前の三国と云（ふ）町に 傾城の勤め奉公して居たが 其頃 かるも ふきのと云二人の朋友がありて三人連れで御化導を頂き つひには三人ながら信者となり 松代は運がよくて 二タ又村の与曾治と云ふ者に受ケ出され 後の二人は此世をいとひ 早く浄土へ参り度（い）とて船に乘出し水に入て死す さて 松代は夫と与曾治を勧め込て 共に吉崎へ度々参詣して喜び居りしが 我家の母は 仏とも知らず 法とも知らず 誠にけんどん邪鬼の鬼婆々

嫁をどしの因縁
婆々ナツ嫁はキヨ

吉崎ヨリ一里離タ処白山
治良兵エト云テ十八ヶ村
ヲ領スル豪士ノ家ニシテ
吉田源之進ト申ス人主家
ヲ辞シテ農トナリ与三次
ト改名ス

或る時 嫁一人して吉崎へ出掛た其相を見て 今日こそはをどしてやって 夫にこりてま
ふ二度参らんよふにしてくれんと 身には白絹をかぶり 面には鬼の面をかぶりて 郷を
離れた道の傍^{カタワラ}に竹藪があり 少しひくき所あり 其の処を今にをひて嫁をどしの谷と云
ふ そこに鬼婆々かくれ込(ん)て 今にも嫁が是迫近よりたなら 此鬼の相たでとび出
てくひつひて 喰わんとしををどしてやろふ まふ帰りそふなものぢや まふ来そふなも
のぢやと 首を長くして待て居ると 嫁の松代はそれとも知らず 吉崎様が済むやいなや
喜び三昧 蓮如様の御化導は いつにいつとて違^変りはなけれども 今日^{今日}は別して第三十五
の願の御讃題 女人成仏の御謂れをあくまで御勧めに預り 有難御座る喜^喜(し) ふ御座る
と 南无阿弥陀仏くく念仏三昧で松林に取か、(つ)た 其時俄に身の毛いよだつと有 夫
とも気がつかず 又松林を南无阿弥陀仏くく念仏三昧で帰る 其内に懷中より小さい鏡
を取り出し 一人ら事を言ふて 此鏡を見るニ付けても 此鏡は朋友のカルモさんが 形
見に私しに呉れた カルモさんは 今頃は極楽に喜んで居らる、盛りで有事 私も追付け
此の世の縁のつき次第後から参り ゆるく御目にかゝります 有難(う)御座ります
喜^喜(し) ふ御座ると念仏三昧 其内松林中場^{中場}までと(う)りかゝると 思ひがけなき道の
傍^{カタワラ}より わーと飛び出 嫁の松代に喰ひ付て 今や喰はんとする故 いかなる松代もを
どろいたの をどころかのぢやなひ 大地に喰ひ付て 一たんは氣絶同様 夫よりじり

／＼起き上りて。はまばははめ喰らば喰らへ 金剛の心の得た身は よもや喰むまじ。
と云て其場を振りちぎつて 我家へ一さん掛にかけこんで 御かあさん只今帰りました
母様今戻りましたと言葉をかけても返事をせねば 相とも知れぬ嫁がてんがゆかぬ 母
様はつひに留守でありた事はなひに 今日に限りてどふいふことぢや 思案して居る内に
ふと気が付て 夫では日頃邪見な人ぢやで ひよつとをどした鬼は 御かあさんぢやなひ
かと 元をどされた所へこはそふに見に行くと 道のかたはらに すーと鬼の相の形で立
て居る 嫁は申 そこに居りやしやれるは 母様ぢや御座りませんかと云へば 鬼婆々が
わあーと泣き出した をれぢや／＼ 助けてくれよ救（ふ）てくれよ をのしををどした
其罰で 手足がしびれて一寸も動かぬ 助けてくれよ救（ふ）てくれよと 玉のよふな汗
を流し とちの様な泪を出（し）て頼む故 嫁は 御母様私が助けて差上たひが 私は助
け役では御座りません 御助け下さるゝは蓮如様ぢやで 是から吉崎へ参りましょう 鬼
を背中に負（ん）で吉崎へ行き 蓮如様の御前へ其鬼の相たの形りなりで出て 兩人共に泪を
流して御願申上たら 其場で御勧めなされ 鬼婆々や／＼ 汝は此世から其様な鬼の相に
なりて 法のさまたげをするよふな大悪人ぢやで 恒沙の諸仏は 大蛇を見るときも女人を
見るな 一度女人を見れば眼マユの功德を失ふと云て 皆御逃げなされた 釈迦如来様は
法華經の上では 女人は仏法のうつはで無（ひ）と御戒しめなされ 助る縁手掛りなひ悪

人女人とは汝が事 今此蓮如が勧むる弥陀の本願は 善人相手の本願でなひ 聖者相手の
六字でなひ 汝が様な怖ろしひ鬼に釣りとる大蛇にまさる悪人女人が 正客ぢやぞよと仰
せられ かゝる尊き御化導を蒙り 是迄の悪さを改悔懺悔して 弥陀の本願を信ぜさせて
頂きたら 面にかぶりた面のふが からつとはなれて落(ち) たとある 其時の面は肉付
の面といふて 今にをひて吉崎には宝物となりて残(り) である事ぢやが 何様な事を聴
聞して見れば 昔し其様なをそろしひ婆々さかあつたかと思わりようが 今日御座の吾々
も顔に面をかぶつて をどした事はなけれども 御たがひの已前の心中は やはり鬼につ
りとる大蛇にまさるをそろしひ心中であつたが 此度といふ此度は いよく弥陀の御念
力にしとげられ 行く先一つ安心させて下されたは 偏(へ) に蓮如様の御蔭ぞと存せら
れたであろふぞなら 何れも御恩の称名南无阿弥陀仏く

三 幅 目

是なる三幅目初段南の所は 女性の御文様の根をこりの所で 女性の御文様をいたゞひて
見ると 文明第四の曆弥生中半の頃かと思ひはんべりしに さもありぬらんと見へつる女
性一二人 男など合具したる人々と仰せられて 前に進み出て御出でなさるゝは 平泉
寺の九郎本尊 あとに御控へなさるゝは 鹿島明神様に八幡様 あなたがたが吾々と同様

の御相に御成りなされ 今は蓮如様の御前へ進み出させられて申(す) 蓮如様 吾々の様なあさまし愚かな者でも 未来が助るなら どうぞ御勧め下されと御願(ひ) なされたら 此蓮如が勧むる弥陀の本願は 智者や聖者が相手では御座りません いかなる愚かなものでも 御洩(も)らしは御座りません 聞(ひ)て信(す)する斗(た)りて 必(かならず)す極楽へ参らせて下さるゝと 御ねんごろに御教化なされたら あなたもついにほづをちが出来させられて 今 は厚く御礼申(し) 上(げ) 両手を合して潤ながら御別れなさるゝ御相

摂受庵見玉尼

偕て是なる所は 見玉尼公の御火葬の奇瑞を現はしたる所 まことに見玉尼公と云(ふ) 御方は 仕合の悪き御方で 若き時 ある御宮家様の所へ御嫁入(り) なされ 夫に死別れなされて 夫より摂受庵と云ふ庵寺へ御入(り) なされて 尼法師となりて 念仏修行をして居りや志やんだが 又ころつと御師匠様が死(ん) で御仕舞なされ 尚々此世をいとひて 清水の観音様へ七日七夜の祈願をなされたら 七日まんとする曉きに御告げなされ 観音様が汝其事が知り度ば 是より吉崎へ参り 汝が父蓮如上人に御願(ひ) 申せよと仰せられ 見玉尼公大に喜びなされ 左様なら私の父は 其様は大善知識で御座りますかと夫より身仕度をなされ 花の都を後に御覧なされて 遙るゝと吉崎へ御出なされて 多屋代の坊に宿り込(ん) て 日夜御化導を蒙り つひに有難ひ信者となり 念仏申して御出なされたが 其後病死なされ 御自身の御子なれば 自ら蓮如様葬式をなされ 此池の

測にて御火葬をなされたら 夜中の頃に多屋代の坊に宿り込で居た人が 目がさめて御火葬を拜んで居ると あら不思議や煙の中より 三本蓮華がずーと生へ出て 其蓮華中より 三体の如来様が現れ 虚空へ御上りなされた故 其事を拜んだ人が 蓮如様へ御咄し申（し）たら 蓮師は不思議とは仰せられなんだ 彼れは吾が教（え）を信じて念仏して居たで 此度病死して浄土へ参りた 夫れは志る志るしぢやと仰せられたとある 御互ひが聞けば 不思議に思はれるが 御開山此界に一人仏名を念ずれば 西方に即ち一蓮有て生すと仰せられて 此娑婆で一人信を得れば 極楽に一本の蓮華が生へ出 其人の臨終には 娑婆の方角を向て招くぞよと仰せらるゝ かよふに頂て見れば 其身の上にして貰ひましたら 今 此相を拜み上に付けても 御恩の御称名南无阿弥陀仏く

二段

本光坊了玄法師因縁の事
爰の一段は 吉崎御坊御焼失の難に御逢ひなさるゝ一段にして あのように御本堂に四方八方へ火が回り どんくともへのぼるに付て 蓮如様は外へ逃げ出し遊（ば）れて眺めて御出なさるゝ 本光坊といふ御弟子が そばへかけ付て申 御師匠様 昨日までも夜前までも御繁昌でありました御本堂が 只今この様にもへるとは残念な事では御座りませんかと申（し）上（げ）たら 御師匠様は 先年大谷のもへた時は 悪僧の為でありて残念で

文明六年三月二十八日南
大門本覚寺の多屋より出
火

あつたが 今はさら／＼そふいふ訳てはなひ 寺中の本覺寺より出火して類火でもへるのぢやで 是は時節到来とあきらめる外はなひ 爰に一つ残念な事があると仰せられて 両眼より泪をはら／＼とこぼさせられる故 本光坊は其様に何か残念に御座りますと御尋ね申たら 是まで這入て居た卓の上に 御開山御直筆の御本書証の巻をとり残して來たが 今にも焼(け)て仕舞うと思へば 是れ斗りは金づくでもまふ取返しはならぬ さすれば 此後同行へ弥陀の本願を勧める磯^{イシズエ}へをなくせる故 是が一番残念なと仰せらるゝ故 本光坊は 御師匠御安じなさるな 夫ほど御大切な御聖教なら 私が飛(び)込(ん)て取しめまする、申(し)たら 本光愚な事申すな 是程までもへ立つ中へ這入て どふして出らるゝものぢや やめにして置けと云て 衣の袖をとらんで御座る故 本光坊も 御師匠様あなたも愚な事を仰せらるゝな 如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし たとへ身を粉にしても 骨をくだひても 報じあきたりのなひ広大の御恩を受けて居ります故 御恩報謝の為なれば 此身は火に焼れて死ふとも 金剛微塵にくだけて死ふともいとひませんと 衣の袖をふり切(つ)て とふ／＼火の中へ あの勢ひで飛び込で仕舞(い) 御居間へ這入て見ると 案に違はず御聖教が一卷残(つ)てある 早速押し頂ひて 早く御渡し申さんと本堂中半までとび出して來が 最早四方八方へ火が回り 中は煙り一ぱい あちらへうろ／＼ こちらへうろ／＼

うろたへ回つて居る内 本光坊は氣の毒や 本堂の棟木がもへ落ち 其棟木に体をはさまれて あがやひても もがひても もふ出らればころ 是非に及す 兼て用意に持込んだ刃物を取り出し 自分の腹を八重十文字に切り開き 中の五臓を残らずつかみ出し 御聖教を腹の中へ納め とふく 真黒仏になつて焼ケ死で仕舞（ふ）た 稍や暫く眺めて居ると とふく たる御本堂は 一天の煙りともへ登り 残りたるものは灰斗り 御師匠様が本光やく 本光坊や あれほど蓮如がとめたもの いふ事を聞かんだ故 とふく 焼ケ死で仕舞（ふ）たか 可愛そふな事ぢや ふびんな事ぢや 早よふ誰ぞ灰をさばひて 本光の死骸を出してくれよ 出せよと仰せらるゝ故 同行衆が灰をさばひて居る内に 本光は棟木の下より 真黒仏になりてころゝと出て来た故 戸板に乘せて御師匠の御前へつり出した 本光はもふ物は云はぬけれども 一念が残つて有て 何となく目で腹の方を知らせる様に見へた故 蓮如様が誰ぞ早ふ本光の腹をさぐつて呉れよと仰せらるゝ故 御弟子が本光の腹へ手を回してさぐると 腹の中から御聖教が出て来た故 其御聖教を御師匠へ御渡し申たら 押頂きて^{ナシ}涙ながらに仰せらるゝ あ、本光が一命を捨てた故に 此大切なる御聖教が 再度我が手に入て喜^{ニギ}しひは うれしひはやと仰せられ 夫より本光葬式も蓮如様が自ら御勤めなされ 御火葬あつて白骨まで御ひろひなされたとある 其時の聖教は 肉付の聖教と云ふて 本派の御本山の法蔵に蔵^{ヲサマ}てであると申事ぢや 何様に聞（い）て見れ

ば 本光が一命をすてたのは 御恩報謝のため 私共はどのよふな御恩報謝が勤まるやと問れたら 誠に御はづかしひ 今日の日暮し御たがひの仕合には 命をすて、報ぜよとの仰せはなく 向ふ様から貰ひもの、御六字を称るばかりが御札とは 吾身にかのふた仕合ぞと存せられたら 今此の御苦労の御相を拝み上げては南无阿弥陀仏く

さて 此二段目北の所は 越前の領主朝倉様親子づれで 蓮如様の御化導を頂き 其場で御掟のケ条書を頂て 御札を申して居らるゝ御相 夫レはよかつたが 其頃又々北国に於て 余宗の坊さんのねたみにより 永らく越前に居せらるゝ事が出来ぬ事になり 吉崎裏からひそかに屋形船に御乗りなされて 御逃げなさるゝ其時 あれなるは若狭の国小浜と云ふ所へ御着船なされ 其前夜に不動さんの祢宜殿に富永権の守といふ人が 夜半の頃に不動様より御告げを蒙られた 権の守やく明朝になると此浜へ大善知識が御出なさるぞや 朝早く御出向ひ申（し） 御出になったら吾家へ御招待いたし 未来助かる法を御聞せに預（か）れ 汝此度御聞せに預からずば 无量永劫助る縁はなひぞやと仰せられた故 今はその様に装束を改めて 朝早くから小浜へ出て 立かゝつて向ふ眺めて居ると蓮如様 赤尾の弥七 大家の彦右エ門と云同行を御連れなされ 御弟子諸共あの所へ御着なされた故 権の守は右の御告を御咄し申（し） 遂に吾家へ御招待申（し） 終夜尊ひ御化導を頂き 立所に有難き身の上となり 其後ち権の守の宅が寺となりて 不動山明王

大蛇女の事

寺と御付けなされた 蓮如上人御旧跡地と相成た事ぢや

是なるは河内国へ御出なされ 爰に九軒在所とて 一ヶ所に九軒の民家あり 其内に空念と云ふ者の家にて 御化導の砌り一人の女が 蓮如様の御前へ進み出て申(し) 上るには承れは此度古へより此所にある古池を埋めなされて 御寺を御立なさるゝと承りましたが夫れに付て私の先生を御咄し申せば 御はずかしひやう御座ります 此所より三里斗りに当る山の上へに住居をいたした狩人の女房で御座ります 嫉妬の念をそろしくて 今生は蛇身を受けて 日に三熱の苦を受けて 此所の古池にながらく住居をして居ります 大蛇で御座ります あの池を御埋メなされては 私の住居場が御座りません故 私の住うだけ御残し下されと御願ひ申(し) たら 蓮如様 それは尤もぢや それでは汝の住ふだけ残してやる程に 汝大蛇とあれば 此後吾が勧むる法を必ず守護するぢやそよと仰せられたら 委細承知仕ましたと申して 今厚く御礼申(し) 元の古池へ立ち帰る大蛇女の相偕て 是なるは三首の御詠の根発り チヤコリ 仏性寺と云ふ人 あれはどふ(云ふ) 訳ぢやと云と蓮如様が仏性寺を御覧なさるゝと 坊さんでありながら 歌はいかひに心を寄せて 仏法に志しがうすひ故 御自身の方より押かけて 一度勧めに御出なされたが あひにく歌会に出て留守であつた故 むなくして御帰りなされ 夫から思はせらるゝには 兎角人を法の道へ引入れるには 其人の好きな道から引入れるが一番早ひ 彼は歌に熱心して居る

三首の御詠歌の御文の由来

故 歌の道から引入れてやろふと思召されて 三首の御歌の這入た御文様を半紙に認メ
九軒在所から木原辺を通る道の傍カタラウに態と落して置きあそばすと 幸ひに仏性寺 歌会の
歸りがけ 道のかたはらに手紙が一本落て有る故 早速拾ひ上げ さてな此手紙はどふ
云ふ手紙ぢや知らん 何は兎に角読んで見よふ 読めばわかる事ぢや 封押切て読ん
で見ると 夫 秋も去り 春も去て 年月を送る事 昨日もすぎ 今日もすぐ いつの間
には 年老のつもるらんとも をばへず知らざりき 是れく有難ひ事斗りを書た手紙
ぢや 全体手紙といふものは 世間通途書方に順のあるもので 先づ始メに時候の挨拶
次家内の案否 夫から自用を書が御定り 今此書面はそふいふ手順もなく 始メから有難
事斗り書てある もふ少し読んで見よふ 段々読ミ下す内 自分が一生懸命に成りて居る
歌が 書いてある故 喜んだの喜ばんのぢやなひ そこて此歌は 定で題があるであろふ
花か月か 何にはとにかく もそつと読んで見よふと眼メこに当て見ると
ひとたひも 仏ケをたのむ 心こそ まことの法りに かのふみちなれ
つみふかく 如来をたのむ 身になれば 法りのちからに 西へこそゆけ
法りをきく 道に心の さだまれば 南无阿弥陀仏と となへこそすれ
是はく有難事ばかり こふいふ書面は 本願寺の蓮如上人より外には無ひ 一度持行て
聞て見よふと 今持て来て御尋ね申す所 蓮如様は なるほど其手紙は 此蓮如が

落した 落し手は蓮如ぢやが 拾ひては御前にひろはしよふとて 態と落しふみをしたが
よふ拾てくれた どふぢや読(ん)て見られたか 有難ぢやなひかと仰せられたら 夫が
因縁の端となり そふいふ御親切な事でありましたか 成程あなたの仰せ如く 折角私し
は坊さんに生ながら 歌はひかひに心を寄せ 今日まで空(し)く日暮(し)をいたした
事の残念なさよと 其場で尊ひ御化導に預(か)りて 有難ひ身の上となられた 是が三
首の御詠歌の根をこりといふもの

四 段 目

偕てあれなる処は 蓮如上人様が紀州喜六太夫ノ所にて御化導の御 作仏坊と云(ふ)人
が出て申(す) 蓮如様 私シに御開山様の御相を書(い)て下されと御願(い)申(し)
た故 取り敢へず白紙の真中へ祖師の御相を御書(き)なされたら 序にそこへあなたの
御相を御書き下され 蓮如様が作仏なにを云(ふ) 二人りの相を書くなれば 始めから
紙に割りをして書(か)ねばならぬ 御開山の御相を書ひてくれよといふたで 真中へ書
ひて仕舞(ふ)たで をれは相を書く場がなひはやと眺めて御出なさるゝと あら不思議
や御開山の御相が ずるゝと脇へ御寄りなされて 其あとへ御自身の御相を書(い)て
御遣りなされ 是が二尊連座の御影と申して 只今では大阪の二尊院と申(す)に宝物と

成（り）て残（り）て有ると申（す）ぢや

其北の処は 洋服を着て立て居る人は きったん国の異人であります 我国吾家にありし時 夫婦の中に可愛ひ一人ら子がありて 其子が病氣の為にころふと死（ん）で仕舞（ふ）た故 さあ其死（ん）だ子が可愛てく仕様がなひ そこで此人は 日頃観音様へ帰依して居る故 観音へ七日七夜の御願（ひ）を申（す）願（わ）くは観音菩薩 可愛ひ我子は死（ん）で今頃は何処に居ります 何をして居ります 御聞（か）せ下され 御見（せ）下されと南无大慈大悲の観音様と御願（ひ）申たら 七日まんずる曉きに御告ケ下され 汝其事が知りたくば 是より日本の国へ参れ 日本の国は泉州界堅木屋道念の方に 本願寺の蓮如上人が御出になる 其処へ参りて御願（ひ）を申せよと御靈告を蒙り それより遠路の所を遙るくと渡海して とふとふ日本へ着船をいたし 蓮如様へ其事を申（し）上（げ）て御願（ひ）を申（し）たら 蓮如様が きったん国の異人や 何程可愛ひ吾子でも 死（ん）で行（つ）た先が凡夫わざで どうして知れる物ぢや 我子が可愛と思ふなら 此蓮如が勧むる弥陀の本願の謂れを聞て信（せ）せよ 未来は浄土へ参ら志（せ）下さるゝと天眼通を得さして下さる故 我子の行た先きも 親の居る所も皆知れるぞよと仰せられ其場に於て尊ひ御化導をあくまで聴聞しテ 立所に有難（い）信者とはなりて 今三拝九拝をして 蓮如様を御敬ひ申（し） 御礼を申して我国我家へ立歸る所 それより我家へ

歸りた上は 毎日／＼日本の方角を向（ひ）て 三拝九拝しては 日本蓮如大菩薩／＼と
御崇敬申（し）たとある

五 段 目

偕てあの南の所は 蓮如様御父三十三回忌の御年回を御勤メなさるゝ所で あとに御控へ
なさるゝは御連枝方 実如上人 実語上人 蓮淳上人 蓮語上人四人の御連枝方が 共に
御助音をなされて御座る所 後との方は皆参詣の者である 其北の所は 山科の領主海老
名五良左エ門を始メ 大勢の同行の懇志によりて 立派に山科御坊が出来上りて 今は御
真影様を御遷座なさるゝ御道中の所

六 段 目

上の北の所は 御師匠円光をはなつて 御聖教御覧なさるゝ御相 其時あの後に控へて居
るは 道宗といふ御弟子 今夜は御師匠の御居間に明るを灯して置かなんだに 余りどう
明るがせるが どういふ物ぢや知らんと 襖をそふと明けて見ると 円光を放つて御聖
教を見て御出なさるゝ 道宗あのよふに両手を合せて拝（ん）で居ると 御師匠は 道宗
何をするやと御尋ねなされ 私はあなたは正身の如来ぢやとは思ふて居りましたが 只今

道宗円光を拝む事

八幡様の祢宜祇曾の因縁

はいよ／＼正身の御相を御見せ下さ（つ）た故 是で拝（ん）て居りますと申（し）上たら 蓮如様が 道宗此事は必ず人に云（ふ）ではなひぞよと仰せられた

上の真中の処は 紀州国祇曾^{キソウ}云人で 八幡様の祢宜殿 此人は誠に／＼貧乏で／＼しかたがなひ故 伊勢の大神宮様へ七日の祈願をして 大神宮様／＼ 私は貧乏で／＼致し方が御座りません 多分な御願（い）申（し）ませんが 其日／＼のきかつを凌ぐだけの福分を御与へ下されと御願（い）を申（し）上たら 七日まんずる曉きに御告げなされ 汝そふ（いふ）事が願ひ度（く）ば 是より山科へ参り 蓮如上人に御願（い）申せよと御告（げ）なされた故 年十三になる糸竹といふ娘を連れて 遙る／＼と山科へ参り 今は蓮如様の御前へ出て御願（ひ）を申たら 蓮如上人 祇曾や／＼ 此世に於て貧乏過福はみんな先生よりの定（ま）る事ぢや 何ほど神様に御願（ひ）申（し）上（げ）ても それは及ばん事ぢや 夫よりも吾れが勧むる弥陀本願のいわれを聞て信せよと 其場にをひて尊ひ御化導を聴聞して 糸竹諸共に有難き信者となり 最早なさぬ功德の主となり 修せぬ善根の主^{アルジ}となり 大福長者の如き心となりて 今は厚く御礼申（し） 吾家へ立帰る所の相 それより吾家へ立帰りは後は 糸竹と云（ふ）娘は 一生が間嫁入（り）をせず御法義の御相続をして歩いた故 世間の人が糸竹とは云はずして 仏御前ぢや仏御前ぢやと云（ひ）ならしたとある 其仏御前の墓が 紀州日高郡日高と云ふ処に あり／＼

御足の疵を御らんなさ
る、

と残つて有ると申(す)事ぢや

一番南の処は 蓮如様が御連枝御弟子に御足の疵キズを御見せなさる、みんな見て呉れよ
をれが一代の間 諸国を駈(け)て回りて化導をせる内 此様に生ナま疵がたえなんだと仰
せられると 御連枝はあのよふに指さしをして あなたが其様に御足に疵の絶へぬ程の御
苦勞があつたなればこそ 一旦衰(え)た真宗 元の如くに引立て 此様に御繁昌となり
ましたは 偏(へ)にあなたの御蔭なればこそと 御足の疵を眺めて 御喜びなされて御
座らせる、御相 かよふに聴聞して見れば あなたは御足に疵の絶へぬほどの御苦勞 そ
れと云ふもみんな吾々の為で有りたぞと存ぜられたら 今此御苦勞の御姿を拝み上るに付
ても 何れも御恩報謝の称名諸共 謹で拝礼を遂ツけられよふ

四 幅 目

偕て 是なる四幅目の初段は 或時蓮如様心の内で思はせらる、には 大阪と云ふ在所は
過去七仏御出現在せられ 仏法有縁の地で有る故 大阪に一字建立したれば 定めて法が
弘まるであらふ 何処に寺を建てたらよからふと御弟子を連れて 土地を見に御出なさ
る、と 古への聖徳太子様が 突然顯(わ)れ玉ひ あなたは此所に一字御建立の思召あ
りて 御出になりましたそうなが 其の場所が私が御案内いたしますと云て 石山と云ふ

大阪建立因縁

処へ連れて御出なされ 偕此石山を引均らして一字御建立なさるゝと 後には必ず仏法が御盛（ん）になりますと云つて 其時に此所の大地を掘（ら）せらるゝと 石や瓦が沢山出ます 夫れを御用ひなされと云つて 其場で書き消す如くなくなつて御仕舞（ひ）なされた 蓮如様其後人夫を当て大地を掘（ら）せなさるゝと 石や瓦があの様に沢山出て来て それを御用ひなされ 大工左官を頼（ん）で御建立なされたが 上と下とにかけての御相が 大阪本願寺の体相 庭の内に居らるゝは 参詣の者である 之に依て大阪建立の御文様には 大阪といふ在所は 往古より如何なる約束のありけるにやと仰せられた事其処で蓮如様は 永々の御化導の御勞れで御病とならせられ 元の山科へ帰り度（き）故送り届けて呉れよと仰せらるゝ故 実如上人が御迎（ひ）に御出なされて 御病氣の事なれば 今は手輿に御乗りなされて 山科へ御帰りなさるゝ御道中の御相其北の所は 久々に山科へ御帰りなされて 御真影様へ拝札を遂けて居らせらるゝ御相其上の南の所は 南殿に御入（り）なされて信証院と御名乗りなされ 吉野の同行が根こぎにしてくれた桜を御手植へになされ 爛漫と咲き乱れて居るのを御覧なされて 一首御詠みなされ。咲きつゝく 花見るたびに なをも又 いと願はしき 西の彼の岸。と御よみなされ 此御歌の心は 此娑婆で咲（い）た花を見てさへも 此のよふに美しく（い）ものを今にも極樂へ参らせて貰へば どのよふにあるふと先を御喜びなさるゝ御姿 真中

の所は大病とならせて 伊達イダテの左近ササネと云ふ御宮家様が 天子様より病氣見舞の御使者に御
立なされた御方 其時に医者に診察をして御貰ひなされ 其場で一首御詠みなされた。ハ
十路ツジッ 定業定まる 吾が身かな 明応ヤト八歳 往生こそ参る。と御詠みなされ

又 其上の南の所では 蓮如様が 海老名五良左エ門が呉れた栗毛の馬を爰へ引出して呉
れよと仰せらるゝ故 あの方に同行は御前へ引出したら 馬のそばへ御寄りなされ 馬の
背を御撫でなされて 馬や／＼汝は永らくが間寵愛を致したが 其間尊ひ法を聴聞したで
あらふが 畜生の残念さには 聞いても信ずる事コトが出来なひ 其替りには次生は必ず人間
に生るゝ故 其の時は法を聞き（い）て信しぜよ 必ず極楽へ参られるぞよと御懇ろに御化導
をなされたら いかなる畜生とは云ひながら 頭コウをうなだれて足を折つて両眼より涙を
流し 有難う（う）御座りますと御礼申し（し）上う（げ）た相

堅田の明誓が呉れた鶯を逃して呉れよと仰せらるゝ故 慶聞坊が椽先きへ出して 籠の戸
を開くと 鶯うが喜よろこしそうに逃に（げ）て行き 其姿を御覧なされて 一首御詠みなされた
異なるを 囀ささずる鳥と 思へども 法を聞くと 知識なりけり と御詠みなされた

又其北の所は いよ／＼明応八年三月上旬の事 此の世の暇乞にもう一度 御真影様に参
詣が致したひ をれの身がかなわぬ故 本堂迄釣出して呉れよと仰せらるゝ故 御弟子方
あのよふに御釣り申す 其時 此世の暇乞ぢやで みんなおれが見たからふ をれも御前

御往生の一段

達が見たひ故 今日逆さまに釣よと仰せらるゝ故 今逆さまに釣ながら 御弟子方よ
く御顔を拜見すれば 御開山の御相好と少しも違はなんだとある

上の北の所 いよく明応八年三月二十五日と相成り 最早や病の床に休せられ 出る息
も南无阿弥陀仏 引く息も南无阿弥陀仏 念仏三昧の其中から 誰ぞ我れが枕元で 何ん
ぞ有難ひものを読んで聞(か)せよと仰せらるゝ故 慶聞坊 大阪建立の御文をよんで御
聞せ申たら 夫れも有難ひが もそつと何かよめと仰せらるゝ故 又 末代无智の御文を
三度御聞かせ申(し)たら 暫く待てと仰せられ 今そこで読(み)て聞(か)して呉れ
るは 此蓮如が作つた文ちやけれども 聞(い)て居れば をれが作(つ)たとは思はれ
ん 生身の阿弥陀如来様が 枕元へ御出下されて 直くの御化導を蒙ると思へば 有難
(い)やらうれしいやら さあもつと読めと仰せらるゝ故 又操返し巻かへし七遍まで御
聞(か)せ申す内 頭北面西右脇に伏し 如来涅槃の儀を御守りなされ 言に余言を交へ
ず 南无阿弥陀仏くくくくと念仏三昧で居せられたが 七遍目の穴賢くくと云ふ
言の終ると共に 長々の此世の御化導の縁が終せられ 目出度浄土へ往生を御とげあそば
されたとある 其時そば二居らせらるゝ御方々は 闇夜に灯を消したる心持 泣ざる者は
一人もなかりた⁽³⁾とあるあの御相

南の所は いよく是非に及ばす⁽⁴⁾ 山科野村にをひて御火葬の体 あの赤ひ装束を着て居

は つるめ僧と云て 身はいやしけれども 御火葬番を蒙むた人 後は御連枝 御弟子
同行 御火葬場まで賑合かに御送りを申（し）上（げ）たる相 其時 都に於ては 天子
様の御菩提所の泉涌寺の長老を始めとして 東山の絶頂に登りて拝（ん）で居ると 御火
葬の真上の所に 仏法守護の白龍が来るやら 白き鳥が群れるやら 虚空より大なる蓮華
がちら／＼と降り下りたとある かよふな事を聞（い）て見れば 吾々は誠に不思議に
思れるが 是は当り前ぢや 蓮如上人の御本地を尋ね奉れば 極楽浄土の生身の阿弥陀如
来様 人毎に届かぬ事のかなしさに 吾れが使に吾れが来にけりと 六百有余年の古へに
大進有範卿の御殿へ御生れなされ 九歳の春御得度ありて 比叡山二十年の御修行なされ
所方（通）の靈仏靈社へ御祈願ありて 遂に六角堂の観音の御告により 法然上人の御弟子とな
り 其後ち真宗御開闢あらせられ 九十年の御苦勞終らせられ 其后は二代目が如信上人
三代目は覚如上人 四代目は善如上人 五代目は綽如上人 六代目は巧如上人 七代目は
存如上人の御代と相成れば 真宗がきへ／＼と相成た故 極楽にちつと眺めては居られん
で 亦々此世へ御出ましなされて 今度は蓮如上人と御成りなされ 永々の御苦勞終らさ
せられて 今は元の浄土へ御還りなされた これを師恩と云はねばならぬ 誠にかよふに
頂きて見れば みんな私し故の御苦勞であつたぞと存せられたら 何れも御恩の称名諸共
に 謹で拝礼を遂げられよふ

本願信ずる一念に 弘誓の船に乘せられて 若不生者の帆を巻あげ 師徳の順風に吹きたてられ 報謝相続の櫓^{ロカ}を立て 憎（い）や可愛ひの其中を こぎつけく時々刻々に近寄る涅槃の港 今日が浄土の船つきか 今宵が蓮台の上り場かと 存ぜられたであらうぞなら 受けた御恩の万分一 さても嬉（し）や南无阿弥陀仏く 櫓もかひも 我とは取らで 法りの船 たゞ船人^{フネ}に任せてぞゆく 極楽は日々に近くは成りにけり あはれ嬉しや老の暮かな 早や急げ爰は三途の昼休み 晩のとまりは極楽が宿 今にも命終りなば 御待ちもうけの御浄土とは 偕てもうれしや 御恩とふとや南无阿弥陀仏

昭和三年十月上旬 病中謹写

鳥居 富弥

康順寺蓮如上人御縁起

檀上御厨子ノ内ニ敬（ヒ）タテマツルハ信証院殿蓮如上人ノ尊影ナリ 御年十五歳ヨリ祖師聖人御相伝一流ノ信心為本ノコトハリヲ詳（ラカ）ニシ給ヒ真宗再興ノ上人ニテ在ス時機相応ノ要法ナレハ^{（ハ）} 稻麻竹葦ノ如ク御繁昌 大谷ノ門前市ヲナス 尔に觀正^{（ミ）}六年春日

叡山ノ子タミニヨリ 祖師見真大師ヨリ已来一百有余年 御化導在シタル大谷ノ御本
廟モタ、一天ノ烟リトナリ 呼 御イタハシヤ惠燈大師は 近江国堅田 日野 金ヶ森
田舎辺鄙ニ御身ヲ忍バセラレ給フ 折柄西端村油ヶ淵ヨリ出現シ給ヒタル佐々木如光 勇
力無双ノ御弟子ナレハ 是ヲ便(リ)ニ思召 三河国へ御下向在シ 西端村(三) 御足ヲ
止メ御教化遊ハサレケレバ 貴賤道俗生身ノ如来ト等シク御敬ヒ 本願他方ノ謂ヲ聴聞シ
往生ノ素懷ヲ遂ケ奉(ル) コレ偏(ヘ)ニ上人御化導ノ顯レゾト深ク喜(ビ)ケリ 既
ニ三年ノ春秋ヲ送ラセラレ御帰洛ノ砌 当国御帰依ノ同行 御別レ悲ミケレバ 御形見ト
シテ筆ヲ染サセラレ 御真影ヲ御残シ遊ハシ 一首ノ御詠歌ヲ添ヘサセラレタ 恋シクハ
南无阿弥陀仏ヲ称フヘシ 六字ノ外ニ スミカナケレハ ト詠ミ給ヒテ 了全御坊へ授ケ
玉ヒ 末代今日ノ我人マテ御コ、ロヲ込サセラレタル尊影ナレバ 御存上ノ上人へ拝顔ノ
思(ヒ)ヲナシ 称名諸共謹テ拝礼ヲ遂ケラレマシヨ